源氏物語

きりつほ
はゝきゝ

第百四十一函

記

太政官文庫

内閣文庫
番號	和 32334
冊數	30（1）
函號	202 353

内閣文庫 和書 類 號 冊 架

共卅

202-353

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

源氏誕生より十一才まで

いづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給ひける
なかにいとやむごとなききはにはあらぬが
すぐれてときめき給ふありけりはじめより我は
とおもひあがり給へる御かた〴〵めざましきもの
におとしめそねみ給ふおなじほどそれより
下らふの更衣たちはましてやすからず朝夕の
宮づかへにつけても人の心をうごかしうらみ
をおふつもりにやありけむいとあつしく
なりゆきもの心ぼそげにさとがちなるをいよ〳〵
あかずあはれなるものにおぼして人のそし
りをもえはゞからせ給はず世のためしにもなりぬ

桐壺更衣

めべきこれもてなしならかんだちめうへ人なども。
あいなくめをそばめつゝいとまばゆき人の御覚(おぼえ)
なり。もろこしにもかゝることのおこりにこそ。世も
みだれあしかりけれと。やう／＼あめのしたにも
あぢきなう人のもてなやみぐさになりて。楊貴(やうき)
妃(ひ)のためしもひきいでつべうなりゆくに。いと
はしたなきことおほかれど。［桐壺更衣］かたじけなき御心ばへの
たぐひなきをたのみにてまじらひ給ふ。ちゝ大納言(だいなごん)は
なくなりて。はゝ北(きた)のかたなんいにしへの人のよしあ
るにて。おやうちぐしさしあたりて世の覚(おぼえ)花(はな)
やかなる御かた／＼にもいたうおとらず。儀式(ぎしき)

ともゝてなしたまひけれど。とりたてゝはか／＼しき
うしろみしなければ。ことある時はなをより
所(どころ)なく心ぼそげなり。さきの世にも御ちぎりや深か
りけん。世になくきよらなる玉のおのこ［源氏］みこ
さへむまれ給ひぬ。［内心］いつしかと心もとながらせ給ひて
いそぎまいらせて御覧(らん)ずるに。めづらかなるちご
の御(え)かたちなり。一のみこ［朱雀院］は右大臣(うだいじん)の女御(にようご)の御はら
にて。よせおもく。うたがひなきまうけの君と
世にもてかしづき聞(きこ)ゆれど。［源氏］この御にほひには
ならぶべくもあらざりければ。おほかたのやんごとなき
御おもひにて。［源氏］このきみをば。わたくしものにおぼし

うつさするうらみやるかたなし。（更衣）はじめよりをしなべ
ての上宮（みや）づかへし給べききはにはあらざりき
おぼえいとやむごとなく上衆（じやう）めかしけれど、わり
なくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御あそびの
おりおり、なにごとにもゆへあることのふしぶしには
まづまうのぼらせ給ふ。ある時（とき）にはおほとのご
もりすぐしてやがてさぶらはせなど、あながち
に御まへさらずもてなさせ給し程に、おのづから
かろきかたにもみえしを、（源氏）このみこ生まれ給ひて
のちはいと心ことにおもほしをきてたれば、坊（ばう）にも
ようせずは、（源氏）このみこのゐ給べきなめりと、一の

（朱雀院）みこの女御（にようご）は、おぼしうたがへり。人より（弘徽殿女御）さきに
まいり給て、やむごとなき御思ひなべてならず。
みこたちなどもおはしませば、此（この）御かたのいさめを
のみぞ、なをわづらはしう心ぐるしう思ひ聞（きこ）えさせ
給ける。（更衣心）かしこきみかげをばたのみきこえながら、おと
しめきずをもとめ給ふ人はおほく、わが身はかよ
わく、ものはかなきありさまにて、なかなかなるもの
おもひをぞし給。御つぼねはきりつぼなり。あまたの御
かたがたをすぎさせ給て、ひまなき御まへわたりに
人の御こゝろをつくし給ふも、げにことはり
とみえたり。まうのぼり給にも、あまりうちしきる

おり〳〵はうちはしわた殿のこゝかしこのみちに
あやしきわざをしつゝ御をくりむかへの人のきぬ
のすそたへがたうまさなき事どもあり。又ある
時にはえさらぬめだうの戸をさしこめこなたかな
た心をあはせてはしたなめわづらはせ給ふ時もおほ
かり。ことにふれてかずしらずくるしき事のみ
まさればいといたうおもひわびたるをいとゞあはれと
御らんじて後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ更衣
のざうしをほかにうつさせ給ひてうへつぼねにた
まはす。そのうらみましてやらんかたなし

（源氏）これここ川はなりけるしれたる海でみれども。
（朱雀院）一の宮（こや）はさてまかりしはどしずらばうき。
おさめのもれとつゝていうじうきせのまふ
それはつけても世のそしりのおほれどもれ
（源氏）みゝのをまもけもておいまで分れるもち心づ分あり
がくめづしこまでこしわかとえそねこあへのかは
ずものゝ心もりのかうゑハかゝる人も世はいぞおかずるも
のなりそりとあさましさまでめをおどろかし
まふそれらしれ（相壺更衣）夜（よる）こゝやまと所（どころ）そるさきこうちは
わづらひてずおでたむとしまい（流門）とうしもかゝる
ゆるさせすりびどしごろつねのあげしさまるり

かへれバためなれて程しころみかとのさまハ
すかる日（更衣）ごともりのそてさりてみ六日れほどる
いとよりうなれバらぐるみるくしぞるきそて
まうてさせそてまうりのおふかるおりすすも
あうまじきさなうもしそでとこゝろばかひ
とそでみこと（源氏）をいとゞめさそてまりて出びて出のみ
（流門）かぶらかれバさみそもえとゞめさせのかずれ涙
こどたる（づる）とうぬおほつれさとをいかうらく
おほさうい（更衣）とまかひやるうけらげるかゝ今の
いとうおもやきていとゆそれともとらひもみ
なごしきるまいぞも（きこ）いくやしずあつかるきう

まきえいりつゝものし給を御らんずるにこし
かた行末おぼしめされず。よろづのことをなく
〳〵ちぎりの給はすれど。御いらへもえきこえ給は
ず。まみなどもいとたゆげにて。いとゞなよ〳〵
と。われかのけしきにてふしたれば。いかさまにと
おぼしめしまどはる。てぐるまのせんじなどの
たまはせても。又いらせ給ては。さらにえゆるさせ給は
ず。かぎりあらんみちにもおくれさきだゝじと
ちぎらせ給けるを。さりともうちすてゝはえゆ
きやらじとのたまはするを。女もいといみじと
みたてまつりて

かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほ
しきは命なりけり。いとかくおもふ給へましかばと。
いきもたえつゝきこえまほしげなることは
ありげなれど。いとくるしげにたゆげなれば。かく
ながらともかくもならんを御覧じはてんとお
ぼしめすに。けふはじむべき祈りども。さるべき
人々うけたまはれる。こよひよりときこえいそ
がせば。わりなくおもほしながらまかでさせ給ひけれ
ば。御むねのつとふさがりて。つゆまどろまれず。あかし
かねさせ給ふ。御つかひのゆきかふほどもなきに。なほ
いぶせさをかぎりなくのたまはせつるを。夜中うち

すぐるほどになんたえはてたまひぬとてなきさは
げば。御つかひもいとあへなくてかへりまいりぬ。き
こしめす御心まどひ。なにごともおぼしめしわか
れず。こもりおはします。みこはかくてもいと御らん
ぜまほしけれど。かゝるほどにさぶらひたまふれいなき
ことなれば。まかでたまひなんとす。なにごとかあらんとも
おぼしたらず。さぶらふ人々のなきまどひ。うへも
御なみだのひまなくながれおはしますを。あやしと
見たてまつりたまへるを。よろしきことにだにかゝる
わかれのかなしからぬはなきわざなるを。ま
してあはれにいふかひなし。かぎりあれば例の

十七

さほうにおさめたてまつるを。はゝ北のかたおなじ
けぶりにものぼりなんとなきこがれたまひて。御おくり
の女房(ねうばう)のくるまにしたひのりたまひて。をたぎと
いふ所にいといかめしうそのさほうしたるにおはしつき
たるこゝち。いかばかりかはありけん。むなしき
御からをみる〳〵。なほおはするものとおもふがいとかひ
なければ。はひになりたまはんをみたてまつりて。今は
なき人とひたぶるにおもひなりなんとさかしう
のたまひつれど。くるまよりもおちぬべうまどひたまへばさ
はおもひつかしと。人々もてわづらひきこゆ。内裏(うち)より
御つかひあり。三位(みつ)のくらゐおくりたまふ。勅使(ちよくし)き

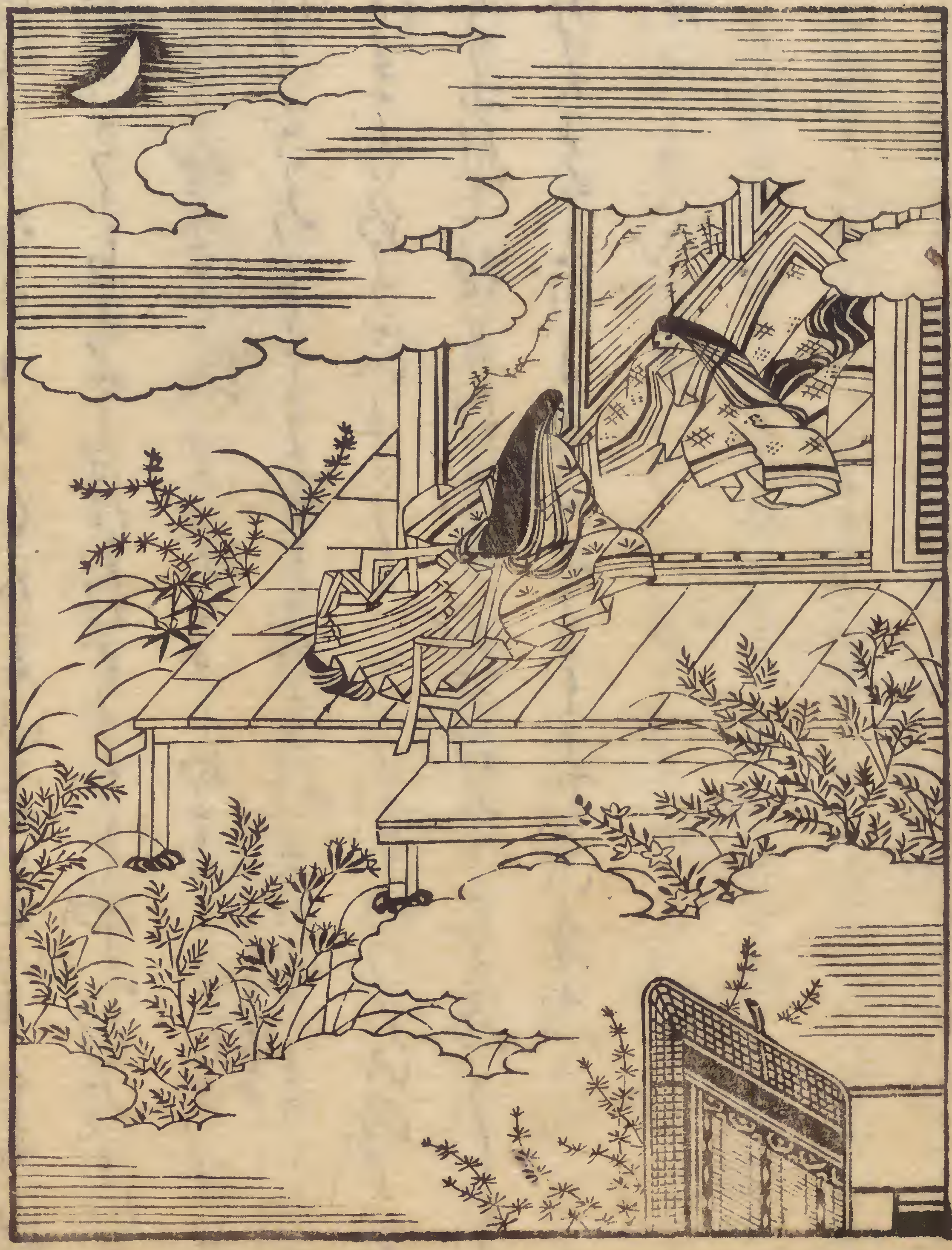
てぞ此宣命よむなんかなしきことなりける女御と
だにいはせずなりぬるがあかずくちおしうおぼ
さるればいまひときざみのくらゐをだにとをく
らせ給なりけり是につけてもにくみ給人〲おほ
かり物おもひしり給はさまかたちなどのめでた
かりしこと心ばせのなだらかにめやすくにくみ
がたかりしことなどいまぞおぼしいづるさまあし
き御もてなしゆへこそすげなうそねみ給ひしか
人がらのあはれになさけありし御心をうへの女房
ども恋しのびあへりなくてぞとはかゝるおりにや
やと見えたりはかなく日ごろすぎて後のわざなどにも

こまかにとぶらはせ給ふほどふるまゝにせんかた
なうかなしうおぼさるゝに御かた〲の御とのゐ
なども絶てし給はずたゞなみだにひちてあか
しくらさせ給へばみたてまつる人さへ露けき秋
なりなきあとまで人のむねあくまじかりける
人の御おぼえかなとぞ弘徽殿などにはなをゆるし
なうのたまひける一の宮を見たてまつらせ給にも
わか宮の御恋しさのみおもほし出つゝしたし
き女房御めのとなどをつかはしつゝありさまを
きこしめす野分だちてにはかにはださむき
夕暮のほどつねよりもおぼし出ること

おほくて。ゆげひの命婦といふをつかはさる。
夕つく夜のおかしきほどにいだしたてさせ給
ひて。やがてながめおはしますかうやうのおりは
御あそびなどせさせ給ひしに。心ことなる物のねを
かきならし。はかなくきこえ出る言の葉も。人よりは
ことなりしけはひかたちの。おもかげにつとそひて
おぼさるゝにも。やみのうつゝにはなをおとりけり。命
婦かしこにまかでつきて。かどひき入るゝより。けは
ひあはれなり。やもめずみなれど。人ひとりの御かし
づきにとかくつくろひたてゝ。めやすきほどに
てすぐし給へるを。やみにくれてふし給へる

ほどくさもたかくなり。のわきにいとゞあれたる心ち
して。月かげばかりぞ。やへむぐらにもさはらず
さし入たる。みなみおもてにおろして。はゝ君も
とみにえものもの給はず。いままでとまり侍るが
いとうきを。かゝる御つかひの。よもぎふの露
わけ入給ふにつけても。いとはづかしうなん
とて。げにえたふまじくないたまふ

命婦詞
まいりては、いとゞ心ぐるしう、心ぎもゝつくるやう
になんと、内侍(ないし)のすけのそうしたまひしを、
もの思ひたまへしらぬこゝちにも、げにこそいと
しのびがたう侍りけれとて、やゝためらひて、おほ
せごとつたへきこゆ。しばしは夢かとのみたどら
れしを、やうやうおもひしづまるにしも、さむべ
きかたなくたへがたきは、いかにすべきわざにか
とも、とひあはすべき人だになきを、しのびて
はまいりたまひなんや、わかみやのいとおぼつかなく、露(つゆ)
けきなかにすぐし給ふも、心ぐるしうおぼさるゝ
を、とくまいりたまへなど、はかばかしうもの給



こゝをやしきむをかへてきまつりはいへと心には
くみてそまつらんとおぼしつゝまゐまいしを
けふめぐれそしられ心ぐるしさまうけし給くり
もろそめやうまそてたんまんで給ひめりそて文
たてまつる（文衣母詞）めもみて給ひめまゐりつゝきおほせごと
とひかりまてなんとてこれ御ふ（勅書）くへはすゝてうち
まぶるうてもやと〳〵まちずく月日まちへてけ
このびかびはわりうすきわざまたんいうけるき
今もいうまとさひやりつ〳〵もろともまろくでまめ
おぼつかうさといまはるをむかしわりこゝろなきず
らへてもれしのへなどつまやりまうりせめて

（侍）こゝやごゝのつ秋わきむすぶ風のをとゝ小萩（にたき）
がもとをさひしそやれとあれどええまつそむいか乃（文衣母詞）
ちなかきれいとつりおもふすへもうつゝ松の木
まそんつとくるまくつしうさすへ御れはもつしぶ
まいゆきうひ給らんてとらはもしていしけずりおほ
くたすんかーつきにおほちかしとさひくうけし給
ろうあはしかつくいえだすんせひのへさうまうしき
（源氏）わか家いつまおもほしきうまゝまいりのうへこと
そのこたんおぼしいそくめればとゝくうりまされ
りしうるてまつり給ちなどうちくまさせのへ家
こゝをそそうりしのへゆかしこさまゝゝへれはうく

うるおひしまゝもいまく〳〵しうこそしけるなど
のゝ御家(源氏)ハおん浦とのごもりまゐらせ候(令嬢方)。こゝろそてまいらせて
くらしくれさるさ夜もそうし侍りまゐらすさま
ちおくしまいらせんを秘(よ)うけ侍りぬべしとていそぐ
られ(文衣母方)しまいらせ心のやこもにかうさうらふとぞうる
とうくつり(斎イ)は实えまはしら侍るを。やさしくにも
心のどるよまいでたまへどしごろうれしくおもふ
ざしこさつねでまでたちかけゆしおどうく家
れをうそこうそこてまつり。夜ごとつれなき命
まも待られむまれし时よりおもふ心づかりし人
まて。御大納言(こざいなごん)いまいとなりけまでさしけん人のやうづく

のかいちらしずゝげさせまいらせ。うたゝろくなりぬ
とそしくちらおしうせひとげおもうなを。夜(よく)ていさゝめを
れ侍しかバ。ちかくもうらしうこもせふ人ならさ夜
じらひハ。伴くなりべさこぞくおもふさまへなかるゝ。
さぞられゆいづるむとさへしとぞうるもまいらし
まて侍しと。月まつのまうまのでの心ざしれゆうげ
まうしけるさま人けるさきちらとうくしつまゝ
らひまよめりつるを。人のそねみつくつまらやすく
めごと御ほくなすりそひ侍るゝ。まつこさ夜なるやうにぞ
つおもうくなすり侍めれバ。うそりてハつらくなんと
うさきれ心ざしとやふかくへられ侍る。これもかりなるさ

心のやみになんといひもやらず。むせかへり給ふほどに
夜もふけぬ。うへもしかなん。我御心ながら。あながち
に人めおどろくばかりおぼされしもながかる
まじきなりけりと。今はつらかりける人のちぎり
になん。世にいさゝかも人の心をまげたることはあら
じとおもふを。たゞこの人のゆへにて。あまたさる
まじき人のうらみをおひしはてはては。かう
うちすてられて心おさめむかたなきに。いとゞ人わろう
かたくなになりはつるも。さきの世ゆかしうなんと。
うち返しつゝ御しほたれがちにのみおはし
ますとかたりてつきせずなくなく夜いたうふけぬ

れば。こよひすぐさず御返りそうせんといそぎ参る
月は入がたの空清うすみわたれるに。風
いと涼しく吹て。草村の虫の声々もよほし
がほなるも。いとたちはなれにくき草のもとなり
すゞ虫の声のかぎりをつくしてもながき
夜あかずふる涙かな。えものりやらず
いとゞしく虫のねしげきあさぢふに露おきそふる
雲のうへ人。かごともきこえつべくなんといはせ
給ふ。おかしき御をくり物などあるべきおりにも
あらねば。たゞかの御かたみにとて。かゝるようもやとの
こしおかれける御さうぞくひとくだり。御ぐし

あけのでうじめく扨さへなんかうさ人へごうゑうさ
こゝんさこにもいさ源中わたりと姫夕はなしとひて。
いとゞさうぐう北くらう。へのれいのりさ度などおもひいで
けるゆれば。とくまいり給ちんこと式部のいは
梅れど。うくいまく北のさ身のそひてまつらんも
いと今さうゝべし。まんこゝろそてまつりでしげずも
あらんはいとゞしろあてうせひ思えのえて。すかく
ともえまいりせこそてまつりたまふあなりかり。令姫
くまうおほとのごもせさせまいらりけるを、のたまはれは
こゝろそてまつか。おまへのつかぜんざいのいとおもしろき
はちなるをはらんずるやうにてえびやうまかいのくさ

かぎりは、あて宮ぞ入内させたまふをのそてはまかりちかひせ
すめたうりけば、あけられけんずる中根哥は思
亭子院のりせのすて、いせつゆうさままうせのう
やまと云のしどもおもうはるともとつされ
すずぞまつるしとのをさせのすいとゝまやうる
まさ度とはをのす。衣たまりつきしやゑびやうる
そうすけれ涙うけれんずれいば、もうしこさい。ぞくさ前も
侍らず、くるおほをとにつけくばさうすみぢうち心ちは
あしき風かもいとうけれ。わりしもりこそるきぶ
かうへぞきけ心なき。などやうなうきらうがらしさ
せんおほあはざりけるほどぐれんじゆうすべし

清忍
いとゞうしもみじとおぼしさげなれど、さるま
え出びあんへさせ、あつかずはらんじげめし、年月
のつもりさへうきさかりあはれげにおぼしつゞけ
れて時のまもおぼつかなかりしどうくても有
日いかなるなりと、あさましうおぼし絶へさる。
故大納言の御いさめあやまたず、家づくへのほとけ
くもれしよりしおろこびいひあつかさ侍まま
ところそちひかさりつれ、ふかくひなしやとうちの
さまなるにて、いと哀はおぼしやるかたくても、その
づらわか家などおもひいで給はず、さるべきさはい
でもほりなん。今あすくとしてそおもむかんずめ

なごのありさまそうす。かのおくり物御らんぜさす。なき
人のすみかたづねいでたりけんしるしのかんざし
ならましかばとおもほすもいとかひなし
尋ねゆくまぼろしもがなつてにても魂のあ
りかをそこと知るべく。ゑにかける楊貴妃のかたち
は、いみじきゑしといへども、筆かぎりありければ
いとにほひすくなし。太液の芙蓉未央の柳もげに
かよひたりしかたちを、からめいたるよそほひはうる
はしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりし
をおぼしいづるに、花鳥の色にもねにもよそふべ
きかたぞなき。朝夕のことぐさに、つばさをならべ、えだを

かはさんとちぎらせ給ひしに、かなはざりける命の
ほどぞつきせずうらめしき。風の音虫の音につ
けてもものゝみかなしうおぼさるゝに、弘徽殿に
は、ひさしくうへの御つぼねにもまうのぼり給
はず、月のおもしろきに、夜ふくるまであそびをぞ
したまふなる。いとすさまじう、ものしときこしめす。
此比の御けしきを見たてまつるうへ人女ばうなどは、
かたはらいたしときゝけり。いとおしたちかどかどしく
きところものし給ふ御かたにて、ことにもあらず
おぼしけちてもてなし給ふなるべし。月もいりぬ
雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむら

ゑんあさぢふの宿。おぼしやりつゝともし火をか
ゝげつくしておきおはします。右近のつかさのとの
ゐ申のこゑきこゆるはうしになりぬるなるべし
人めをおぼしてよるのおとゞにいらせ給ても
まどろませ給ふことかたし。あしたにおきさせ給ふ
とてもあくるもしらでとおぼしいづるにも猶あさ
まつりごとはおこたらせ給ぬべかめり。ものなども
きこしめさず。あさがれゐのけしきばかりふれさせ
給て。大床子の御ものなどはいとはるかにおぼし
めしたれば。はいぜんにさぶらふかぎりは心ぐるしき
御けしきを見たてまつりなげく。すべてちかう

さぶらふかぎりはおとこ女いとわりなきわざかな
といひあはせつゝなげく。さるべきちぎりこそはおは
しましけめ。そこらの人のそしりうらみをもはゞ
からせ給はず。この御ことにふれたることをばだう
りをもうしなはせ給ひ。いまはたかく世の中の事を
もおぼしすてたるやうになりゆく。いとた
いだいしきわざなりと人のみかどのためしまで
ひきいでつゝさゝめきなげきけり。月日へてわか宮
まゐりたまひぬ。いとゞこの世のものならずきよ
らにおよすげ給へれば。いとゆゝしうおぼしたり。あくる
としの春坊さだまり給ふにもいとひきこさまほし

くおぼさるれど、うしろみすべき人もなく、また世の
うけひくまじきことなれば、中〳〵あやうく覚しはゞ
かりて、色にもいださせ給はずなりぬるを、さばかり
おぼしたれど、かぎりこそありけれと、世の人もき
こえ、女御(弘徽殿)も御こゝろおちゐぬ。かのおば北のかた(更衣母)
なぐさむかたなくおぼししづみて、更衣のおはすらむ
所にだにたづねゆかんとねがひ給ひしに、ま
やうやうにうせ給ひぬれば、また是をかなしびおぼす
ことかぎりなし。みこ(源氏)むつになり給へば、このたびは
おぼししりて、恋なき給ふ。とし月へて、内へまいり
給ひて、かへるまでまつりとくらし

なんあつくのゝしりさう。(源氏)いまはうちにのみさぶらひ給。
なゝつになり給へば、ふみはじめなどさせ給ひて、
世にしらずさとうかしこくおはすれば、あまりおそろしきまで
ごらんず。今はたれもくえにくみ給はじ。
はゝ君なくてさへらうたうし給へとて、
弘徽殿(こうきでん)などにもわたらせ給ふ御ともには、やがて
みすのうちにいれたてまつり給ふ。いみじきもののふ
あたかたきなりとも、うちゑまれぬべきさま
のし給へれば、えさしはなち給はず。女御子(おんなみこ)たち
ふた所(ところ)、弘徽殿の御はらにおはしませど、なずらひ給ふべき
だにぞなかりける。いまはな

あせなまめかしうはづかしげにおはすれば、いとをかしう
しうちとけぬあそびぐさに、たれもたれもおもひ
聞え給へり。わざとの御がくもんもさるものにて
ことふえのねにも雲井をひびかし、すべていひつゞ
けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべきひとの御
さまなりける。そのころ、こまうどのまいれるがなかに
かしこきさうにんありけるをきこしめして
宮のうちにめさむことは、うだのみかどの御いまし
めあれば、いみじうしのびて、この御こを鴻臚館に
つかはしたり。うしろみだちてつかうまつる
右大辨のこのやうにおもはせて、ゐてたてまつる

相人(さうにん)おどろきてあまたゝびかたぶきあやしぶ・
くにのおやとなりて・帝王(ていわう)のかみなきくらゐにのぼ
るべき相(さう)おはします人の・そなたにてみれば・みだれ
うれふる事やはべらん・おほやけのかためとなりて・
天下(あめのした)をたすくるかたにてみれば・又その相(さう)たがふべし
といふ・弁(べん)もいとざえかしこきはかせにていひかは
したる事どもなん・いときようありける・ふみなど
つくりかはして・けふあすかへりさりなんとするに・
かくありがたき人にたいめんしたるよろこび・
かへりてはかなしかるべき心ばへをおもしろくは
つくりたるに・みこもいとあはれなるくをつくり給

へるを・かぎりなくめでたてまつりて・いみじきを
くりものどもをさゝげたてまつる・おほやけより
もおほくのものたまはす・おのづからことひろごりても
らさせ給はねど・春宮(とうぐう)のおほぢおとゞ(大臣)など・いかなるこ
とにかとおぼしうたがひてなんありける・みかど
はかしこき御心にやまとさうをおほせておぼし
よりにけるすぢなれば・いまゝでこのきみ(源氏)をみこに
もなさせ給はざりけるを・相人(さう)はまことにかしこかり
けりとおぼして・無品親王(むほんしんわう)の外戚(ぐわいせき)のよせなきにて
はたゞよはさじ・わが御世もいとさだめなきを・たゞ人
にておほやけの御うしろみをするなん・行(ゆく)さきも

それもしげうつりておぼしさだめて・はかなくうち
くのさんをかうしてさせのふきはてゝまうしらく
ちかさて人々はいとあはれとみえれど・みてくだされた
まひなむ世のうちかひおもひすゝめべくもれしあれ
すくえうれりしつてさうちけん人々まうんぐへさせのうちも・
おもむきは源にまかせば・源氏ぞなかしくそてまいらせ
ゐくおぼしとさそしてうち・年月まうらへて・文衣や
すがのけてうをおかげしけするおりあらし・なく
さむやくさうんべきん々ごとまらしてせの人へど・なみす
ひまおぼさうしだるいとくうしさ世うれとうしとま
しうのこまうしけまおぼし・まりめうゝま・先帝の

世の家の此かくちすぐれかへるこそしらくおもく
しますば・てごうえにまゝまうくりしづうさここしまれ
をさく人まさうて如内侍のまけいは先帝此此時の人
まそかれ家まもうちつしうまいりなれうりそれば
いえけるくおりましくすかりこうそてまいり・いま
もほのこうそてまいりてぐうを給まんやすがの此か
さちみつおん人々を三代のうちやづへまつるこそうり
ぬりま・えうそてまうりつけぬまさきいの家氏ひ先
君しそていよゝおぼしゝおもひいでさせ給はせ給ひる
はりかうさうちち人々またんとそうしけうけり
御心をもうしまやともれこゝろもりてわんごうり

そこしさせたまひけれ・けしきばかりなるにのつらかおもてうや
楊貴妃のめしのいとさかへて・ござりつかの更衣の
あしくなりもてゆくまでなりけれしたるしも心ゆく
しうとおぼしつゝて・すりくちもおぼし
さぶらひけるがどもに・さぶらひもうせのめ心ばそき
さぶらひておりしはすまいにて・わがめのとくちや
おなじつきをひかへんといふわんじろまさく
させたまひさぶらひぬ人でれうしろいとうちはれせう
この兵部卿のみこなどうち心ぼそくておりしまうさ
んくりてうちずくささせのそ心もなくさむ
べくおぼしなりて・まつりしそてまつりのへり・おち

つぎとさきゆ・げまはれくちかつりさ殿あやまちさぶらはで
ぞおぼしめす人ぞ・それは人のはてさぶらひまゐらせて皆るすし
めでたく人もえおもしめ給はねば・うけざり
くあつめするに・それは人もゆるしさぶらひてさぶらひし
また心ざしあやまりなりしぞかし・おぼしまさざる
とはなれども・ひきつゞけて心うかりつれひて・さぶらふ
おぼしたくさむやうなりしもいかゞなるわざなり
さう・源氏の君にてはあくさうのめをもてさ
げくやうせさせたまはざるあへなくず・いつれ
のはかなきもかれ人はおとうとおぼしいうやはあり
とりぐはいでさめでたきなれども・源氏うちたちあそび

まへさまはいとわかううつくしげにてせちにか
くれ給へど、おのづからもりみたてまつる。はゝみや
す所は、かげだにおぼえ給はぬを、いとようにた
まへりと典侍のきこえけるを、わかき御心ち
にいとあはれとおもひきこえ給ひて、つねにまいらま
ほしう、なづさひ見たてまつらばやとおぼえ給ふ。
上もかぎりなき御おもひどちにて、なうとみ給ひ
そ。あやしくよそへきこえつべき心ちなんする。なめ
しとおぼさでらうたくし給へ。つらつきまみなど
は、いとようにたりしゆへ、かよひて見えたまふもにげ
なからずなんなど聞えつけ給へれば、をさなごゝろ
ちにも、はかなき花もみぢにつけても心ざしを見え
たてまつる。こよなう心よせきこえ給へれば、こき
でんの女御、又この宮とも御なかそばそばしきゆへ、
うちそへてもとよりのにくさもたちいでて、ものしと
おぼしたり。世にたぐひなしと見たてまつり給ひ、
名たかうおはする宮の御かたちにもなをにほはし
さはたとへんかたなくうつくしげなるを、世の人ひ
かる君ときこゆ。ふぢつぼならび給ひて、御おぼえも
とりどりなれば、かゞやく日の宮ときこゆ。この君の
御わらはすがた、いとかへまうくおぼせど、十二にて御
元服し給ふ。ゐたちおぼしいとなみて、かぎりある

ことはことをそへさせ給ふ。ひとゝせ春宮の御元
服南殿にてありしぎしきのよそほしかりし御
ひゞきにおとさせ給はず。所〻の饗なども、くらつ
かさ、こくさう院など、おほやけごとにつかうまつれる
おろそかなることもぞと、とりわきおほせごとありて
きよらをつくしてつかうまつれり。おはします
殿のひんがしのひさし、ひがしむきにいしたてゝ
くわんざの御座、ひき入れの大臣の御座、御前に
あり。さるの時にて源氏まいり給ふ。みづらゆひ給
へるつらつき、かほのにほひ、さまかへ給はんことを
しげなり。大蔵卿くら人つかうまつる。いときよら

なる御ぐしをそぐほど、心ぐるしげなるを、うへは
みやす所の見ましかばと思しいづるにたへがた
きを、心づよくねんじかへさせ給ふ。かうぶりし給ひて
御やすみ所にまかでゝ御ぞたてまつりかへて
おりてはいしたてまつり給ふさまに、みな人なみ
だおとし給ふ

おぼしまぎ
るゝおりもありつるむかしのことゝりかへしかなし
くおぼさる。いとゞきびはなるほどは、あげおとり
やとうたがはしくおぼされつるを、あさましうう
つくしげさそひ給へり。ひきいれの大臣のみこばら
にたゞひとりかしづき給ふむすめ（葵上）。春宮よりもけ
しきあるを、おぼしわづらふことありけるは、この君（源氏）
にたてまつらんの御心なりけり。内にも御けしきた
まはらせ給へれば、さらばこのおりのうしろみなか
めるを、そひぶしにもと、もよほさせ給へれば、さ（左大臣）
おぼしたり。さぶらひにまかで給ひて、人々おほみき

なくしまいらせけれど、みこたちの御座のすゑに源氏つ
き給へり。おとゞけしきばみきこえ給ふことあれど、もの
つゝましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえ
給はず。おまへより内侍宣旨うけ給はりつたへて、
おとゞまいり給ふべきめしあれば、まいり給ふ。御ろくの
ものうへの命婦とりてたまふ。しろきおほうち
きに御ぞひとくだり、れいのことなり。御さかづき
のついでに
いときなきはつもとゆひにながき世をちぎる
心はむすびこめつや。げにこゝろばへありておどろ
かさせ給ふ

むすびつる心もふかきもとゆひにこきむらさ
きの色しあせずはとそうして、ながはしより
おりてぶたうし給ふ。ひだりのつかさの御むまくら
人どころのたかすへてたまはり給ふ。みはしの
もとにみこたちかんだちめつらねて、ろくどもしな
〴〵にたまはり給ふ。その日のおまへのおりひつもの、
こものなど、右大弁なんうけ給はりてつかうま
つらせける。とんじき、ろくのからひつどもなど、と
ころせきまで、春宮の御元服のおりよりもかずまさ
れり。中〳〵かぎりもなくいかめしうなん。その夜
おとゞの御さとに、源氏のきみまかでさせ給ふ。

さほうよにめづらしきまでもてかしづきゝこえ給
へり。いときびはにておはしたるを。ゆゝしううつくしと
おもひきこえ給へり。女君(葵上十六)はすこしすぐし
給へるほどに。いとわかうおはす(源氏十二)れば。にげなくはづ(葵上心)
かしとおぼいたり。これおとゞ(左大臣)の御おぼえいとやむ
ごとなきに。母宮内のひとつきさいばらにな
なんおはしければ。いづかたにつけてもいとはなや
かなるに。この君さへかくおはしそひぬれば。春宮(朱雀院)
の御おほぢにて。つゐに世中をしりたまふべき右の
おとゞのいきほひは。ものにもあらずおされ給へり。
御(左大臣)子どもはらはらにものし給ふ宮(葵上の母)の御

くら人の少将にて(左大臣子頭中将と云)。いとわかうおかしきを。右
のおとゞの御中はいとよからねど。えみすぐしたまは
で。かしづき給ふ四の君にあはせ給へり。おとらず
もてかしづきたるは。あらまほしき御あはひど
もになん。源氏の君は。うへのつねにめしまつはせば
心やすくさとずみもえしたまはず(源氏心)。心のうち
には。たゞふぢつぼの御ありさまを。たぐひなしと
おもひきこえて。さやうならん人をこそみめ。にる人
なくもおはしけるかな。おほいとのゝ君(葵上)。いとおかしげに
かしづかれたる人とはみゆれど。心にもつかずおぼ
えたまひて。おさなきほどの心ひとつにかゝり

ていとくるしきまでぞおはしける。おとなになり
給ひてのちハありしやうにみすのうちにも
いれ給はず。あそびのおり〳〵こと笛のねにきこえ
かよひ。ほのかなる御こゑをなぐさめにてうちず
みのみこのましうおぼえ給ふ。五六日さぶらひ給
ひて。おほいとのに二三日などたえ〳〵にまかで
たまへど。たゞいまハおさなき御ほどにてつみなく
おぼしていとなみかしづききこえ給ふ。御かた〳〵の人〳〵
世の中におしなべたらぬをえりとゝのへすぐ
りてさぶらはせ給ふ。御心につくべき御あそび
をし。おほな〳〵おぼしいたつく。内にはもとのし
げいさを御ざうしにて。はゝみやす所の御
かたの人〳〵まかでちらずさぶらはせ給ふ。さ
との殿ハ修理職たくみづかさに宣旨くだりて。
になうあらためつくらせ給ふ。もとの木だち山
のたゝずまひ。おもしろき所なりけるを。いけ
の心ひろくしなしてめでたくつくりのゝし
る。かゝる所におもふやうならん人をすゑて
すまばやとのみなげかしうおぼしわたる。ひか
る君といふ名ハこまうどのめできこえて。
つけたてまつりけるとぞいひつたへたる
となん

源氏十六歳

ひかる源氏なのみことことしういひけたれ給ふとが
おほかるにいとゞかゝるすきごとゞもをすゑ
の世にもきゝつたへてかろびたる名をやながさ
むとしのび給ひけるかくろへごとをさへかたりつ
たへけん人のものいひさがなさよさるはいといた
く世をはゞかりまめだち給ひける程なよびかにを
かしきことはなくてかたのゝ少将にはわらはれ給ひ
けんかしまだ中将などにものし給ひし時はうち
にのみさぶらひようし給ひておほいとのにはたえ
だえまかで給ふしのぶのみだれやとうたがひきこゆ
ることもありしかどさしもあだめきめなれたる

八十、ロ一

うちつけのすきずくしされどは、これまでしかゝめれ
艶上まそて、まれは良げかゝらはひさたゞへ給ばでしく
なるこどを、ためしはおぼしとぐむかくせなんあや
うくまそて、さうましじこされめつまひもうちまし
けり。なずあめられしまつるさしろ。雨のけれもれいをこして
きそい。うとくなずねさまつひのすを。おぼとれまは良おば
つるぐうしめしくおかしれど。よろづの御
ままひなまらればめでしこさ夜まそそうじいぞ
あひつれむすられまさらさでこれれとのお前の
家づへをつとめのふ家げるの中ねはたりまでし
くなれきそしめそ。けそびこされとも。

まうは心やすくなれくちかうまひさらり。右乃
おとゞのひとちうづきのすさは。つれこきみも
いとおうこてずさずまうしこさは〳〵なうさとそ
も我ゐるのつまひまずゆくちて。源氏の出へ給
まうちつれ見るつ。よろひのかくもんともいうそ
ひをまもろともまして。おさく立をくれず。
いづくまてもまけくれ見るの間ぞまぞれづくり
こまりもそずずべのうちはおまふつもをもゝ
しけ入ずるんむつれこそしめけさつれぐくと
かりこて。ちあやうるこひの毎は艶上まも
おさく入ずるなまはれどもおん前もれいよりはのど

やるかた心ちすれば。おほとかにかゝりて。かみども

なじこあつかひてよ。ちかきころけしきなる冬のみ

なかうちにさもをひきいでゝ。中将わらうてゆるし

がれば。さりぬべきすがたはるまんかくれたるべきも

こそとゆるし給ほど。それもうちとけてきこけ

いるしとおぼほさ給む。それゆえしそれも。きたなべきぞ

おほるのはゞずなしねど。ほどくまつけらりさう

そしつゝもみ侍りなんものがたりてうしあしきおり

くまちがひなるらん夕霧なれそこぞ前はゞ

めとゑむずればやむごとなくせちまうしのへき

なごしかやうまおほぞうなるけしきながら

ときちしのべくもはず。かくとちぐきてまんべ

うあればそうハ二のまちの子やすきなるべしうる

りづくるまゝくきはひてなるものどもこそ侍

されとて心はそれぞれかれかなどこゝ中にひひ

あつかもあらもそうそれさるとも思ひおきて

うふもおりしとおぼほどつしくするそて

ときのあさりしつとちかくしあつかうたこと

おほくつゞへのふらめ。すうしらぞや。さてるん

これつしも心よくひしくべきとのけふへくれ

給へんじところあるらんくらえて給へめなど。

まつみでよ

ぬのこれはしも・なんてまうでさいうらくは
あかれ・やうくなんへあるたぐひらくべ
どもれあるさけれそへてかうさ・おりあし
のいへゆえてうらしなどかうはずいかむま
まろきもおほかとこのあれど・ぞもまと
まえみらとさうぞむえてひまうするずまう
まじさはいしこあや・我が心えたらことぐう
とものかでふとやかてゞ人とばおもしめなど
かうしいさこおほかたやなどたちゝそひ
まてのかめておひされてあれかまみ中あれど
もたぐひるとさてたへて・ゆころとそうがう

末摘二箇

あさましもあやしかちおかしくもちおほゆき
わやうにておぼつかなくてとうき行(など)くれをすき
ひとも人まのる心をいろふてもあるまじのづから
ひとりゆくつきてさいはうてもなりみる人を
くれたらうとぶいひくしさそはりめべきる
とぶつくろひをすまるひ出(いだ)さするにそれしあくじと。
そるまいかにしもかくらり思ひいふさむ。まうとく
りとみねをりまみをくりきぬやうかなくなるん
あるべきにしうめるきたるそしるきもそげりしげな
源氏心
れば。しなべてはあられど。我(これ)も覚(おぼ)しけれはすみてしや
二段源氏詞
あん。うちゆくゐてさみりつどもなるさひしくへ

三段頭中将
あらんやとのゝまへは。さりかたなきみんかうちりきは。
惟(これ)光すゝされより御らんとうきるなく口(くち)おしき
きはといふありとおぼゆくりすゞれるきは。
上ノ詞
みずひとしくこそ御めあ。人のこれさうくむまれ
ぬれば人はまそうづれてうちこともおほく。
ぎつ◯んまゝそれけるひしまなりうべし。中将(ちう)これたるま
たゞ人の心ぐるのぎてのそこるゝもむきき
みて。わるべきことうぐくおほゆるべきこしも
のゝきづこといふきそるなれば。しまゝみてくさず
源氏心
しそて。りゝ風あるげある気色(けしき)あるもゆうしくそ。
四段源氏詞
それきれぐくやいりる。いづれを三(さう)のこれをまき

てうつくべき事もとれ忘れすくむまれなるにや男は
忘れなきにぞくて人げなき文などさへのむ
ごらめなどまでなりのぼりたる我が身ぞ家のうち
をかざり人にをとらじとおもへるぞそれけぢめなどは
いふかくべきことにひのけ行ず左の馬の頭藤式
部のあそん流れもれいぜいこもらんとてまいりけり世
のすきものにてものもよくいひとをれるを中将
まちとりてこれ忘れくさわきまへさだめあらそ
光より丈入向巻第一阿仏付 惟光女ニ当
ふいとときてうくさきとおほりだちののぞれども
もとよりさうべきすぢなきぬに世人のおもへるこ
末摘ニ当
ともごはいへどなをてもなりまくもとはやんごと

なきすぢなれども世にうつろふすくなく時世に
うつろひておぼえおとろへぬればこころは縁とし
てことたらずあるびさらしぞ出くるわざなれ
あれだどざりくまことそりて中のしなとぞをく
彩雲拾ニ当
べきずりやうといひひとへのくすれてさまうづる
ひいとうとて忘れさだまりたる中にもまたきざみ
くまて中の忘れのなかはあしぬえらり出川
べきころ日ひなりなまへくのなんぢよりらめあかりも飛び
参議の三位どものかれおほしくちおしりざずもく
明石ニ当
のみざしいやしうぬがやすらうる男ともそなし
かうまひさうけどかざろうるりや家のうちまさ

ぬしなども・おなじめつゝまくらぶくばかりぞ程なる
までまてりしづめたまふすめなれど・おとゞもめづらしく
おぼしいでつゝもてあそびしか・文づくえ（相壺更衣ニ為）よりいでゝちそて
ちひさきあさいとりいづるとあしけども・おほち
しなどいへば・すゞろ（源氏十二歳）なるにさけしさまよりなんべき
なかりとてゆひしを・こし（以中将）人のいとんやうは心得ず
おほきやうとて中ねすくむ・（三位宰以下）ものし（女三宮ニ為）月時代の
おほんちうはひやんごとなきあたりのたちくの
まてなしくさひとそれきこんは中々もいとずな
まさしてうくおもひ出けんといつひろくおぼゆ
べし（常書ニ為）うちあひてすゞれこんもことゞりこれそ

まさうべてきこしくおぼしてめづらかなるまでこゝろにも
おどろくまでたのもしげなるよろこぶべき程なくして・
うとかるとはうちすさめ・さて（夕顔ニ為）世にはかりなき人は
あはれすさびしくはゞれさんむぐらの門にぞひ
のほかならうけなる人のさびられうんこそ
うぎらなくみえつゝしくはおぼし出・いでてちうく
まけんとさふよりしづ人かしこもすんあやしく
心とまるわざなるうち・（藤式部丞妹ニ為）のよしおいもれむつしげに
かゝりすぎ・せうとれわらくげに・おもひやりこと
なることなきをやのうちはいといくせひあがり・
くろくしこいでさもとわざもゆんなりしずこし

さらんかとうどうかてもいかゞせんひのほかはおかし
かうざんずされてこずするさかさのえてひはしそ
とよばざるめさかうかうそですゞかれおかみどもて
我さもこやれど、我はまうとらばまみよのあさまさ守丸
あからをおもひてのかすやとやや心からん。まわおい
みずけでや、うされさるまくおもかまじてかゝげなり
世をとまいおほせんべしさかうされぞどものあるよく
うるかはおるみしかゞりをあどけるくこゝろしのそび
もながとらうすそくぞひよしのくかれはかげほど
めでたくやかそてこそてまかかしこれれあるま
もかみゞかみをえり出でもれあくまじくみし給

さ應ぐの人のへども、ぞうかりかくせけり。おほ
かるの世はつけて、みかきはよろづるさへも。けずしの
とうちうのむべなる紹えしくてむすは。おほかる中まで。
えたなんあひさるむまじかりけるが。おのこれおほやけは
つかすかりけずかくあそさ世のつぐきゑんたなり。たぐさも。
あかとみかけてあれとたなるべきをとうりけるさん
まはかるうへしかし。されどかしこうしとてもびかう
かすかり世中をかうりごとあるべきことなれば。
かくいはあてまよ守そかれあらもはかみまなびさそでこと
ひろさまゆづりつむ。どぞうさ家の門のあるし
とすべき人かりとさひめぐて守まつうでなる

べき事ぞすぐれどもなんかたく思ひわかれはうかり
あふさきるさにてなれめまさりてもありぬべき
人のするわざをすきずきしき心のすさびにまかる。
人のかはり給はまかりてせんのこれさまね
ど。ひとへにおもひさだむべきよるべとすべからま
おほかたは我がち(よが)にいりもしてひきつ
ろふべきことどもなく心はさるやうもやとえり
そめつる人のさふまりがたくれたるべしるずし
もわがおもうつまくかたみのど。かんそめつる契(ちぎり)だうりを
すてがたくてひとまかる人は、おほかめやかりとみて。
さてもうるさく(かん)めのとめもころりまてとてく

あくなら。されどなかなか世のかはり給ふとてまへあら
むかまへは心をそぐいとゆかしきことどもなかしや。
見えざられたなまされええてひまはまして いかく
かれ人はさらにひの(らい)む。おもさくさふすへぬさましる
伊勢ノ御息所ニ答
ちかきさなけるくわやかる月どのどものがたては
ちりもらうじどもとをもてなし。文をうけどおもほく
かるさえりそ。すきづき月のかは心すまる
おもてをつ。まるさやかなもそしかなきすん
なくまるせ。わづかるに思ひ、さくぐらいひとれぞ
いされたるまひさいれどしずくれなるかかいく
木枯女ニ答
まてうくすめかり。あすかひかるめ(とんが)しとされば。あま

まことなるけはひさこそあれて、さりならばあだめく
見どりしめれなんとすべし。こゝが中に、なれめる
かまじくさひとの、うちゐるかはものゝあくれ
ありすくしかるをさいつかぞのたゝけはりおほし
こさるよすゝめるゝなくてもよろこべしこみて
さるに、まさるものめくちかきすゞりをとそへ、みえく
さみだらはひさりなるさいゝしもじうじれ、ひとへん（指くひの女ニ当）
まうちとけさうしろこゝぞりをして、秋夕（あきはて）
のむかりよつけても、おほやけわざくて、れ人のそく
ずまのねどうきはしこそしとれめふもみてよしとも
なかりうきうきを、どうしきさ人よかざとうちまへば○む

やはらくて、こむひとの、さてわざさおもひとちつくべから
むまらうりもりくを、やとうちもとすまのれ、みるぶ
もさしぐさ、おしはあやなかさおほやけがしくて
さて心ひとりにおもひあまりしなど、おほかるを、
なかりは、さうせむとさへいふうちそくむしれてん
されぬさびいづるわくひくをさされ、哀（あはれ）ともうちひ
とうこゝろくまなるまごとぞたまでおくつまさしは
ござみさうんいうゞは口おしりしめ、ざひさふるる
こあさそ、やくくうるしむ人を、どとくひきつ（紫上ニ当）
うひそるは、なでらみざうん、こゝろかでたくとも
るくそし所あるてちみすべし。げにさしむつひてこえ

猿(など)はさてもらうしさうるまつこゆかしこうべき
とこちらるれてハさうべきことをもいひやり・おり
かしまたハいでんかざれあぐことをもまあてしまも・
我心(こゝろ)しおもひうるとなくふうさいてちろうくん八
いとくちおしくそれもしけるまさしうや・ちうとくる
しりらんつね八すうしそはゞくもてし心づこさたゝるさ　花散里ニ有
人の・おりふしにつけていぞてへすゝやうしもおり
うたなど・く夜るさきもれいひもさぐめるそ・げてく
うらなげくど八してもしれましうらしふうちとは
さうにしいうじうとくちおしくねちけがましき
おぼしぐるなくハさでひと人ことれまあめやうそう・

しけるうち心のをもむきたゝずんようべきぞ・つねの
それもかずまいさひとへかりけり・あまりれゆへよし・
心ざへうちそへうんをそ・いろそびはおもひす
うしをくれはうるとあるんをしもあまずちはまこと
めくはへじ・うしろやすくのどけき所ざまつまく
たゞうるべのなさけいとのづるまでつまつべきさまざ　夕顔上ニ有　又伊勢物語ニそくいわれと謂し女ニ有
をや・えんはわきちしてうしこいふべきこさとも・
ここしぬさ夜はしのひそかう人へそつれなくみさほつ
くり心ひとりはさひあまりにはいえんうるそうく
すこうき言(こと)の葉・おくれるうちすみみ・こゝろのぞ
なべきうちことをとゞめて・ふうさし山里(やまざと)・世ざくるれさう

うちつけなどはえひつくれぬ。わかれてはべりし
時め女房などのおかしかりしよそほひも、いとゞ哀は
まさりて心にかゝることゝも。涙せきあへず、おほく
侍りし。今はふるまひもうたてしくなりてかなしび
まさるなり。心ぼそしかくておもひくらすまゝ。
みつめれば人はつきはてにけりとも人のこゝろを
しらぬやうにいひかくれて、人まねもして心をもみ
だれすこしはあらぬ世のあはれおもひまなぶる。いと
けうとくなりておはたゞ心かしこやなど思ひめぐらされ
て、つれづれすこしめれば、やがてあはれなりぬべし。
さらにほどもいと心すめる時までも世にはありても

すべてものおもへばいでつかうしうくところおぼ
しなりけるよなどやうに思ひしわすれつゝひとくさ
さらひ給さすまじうしともおもひかくれぬおもひこ
そつきて、涙おもほゆるふるまひてすちなど、恋
のはかなかりけるなりけるものおもひつれづれなど
いつまでかかりしひとのいふこととなりておもへなく
ころはえそれがうちひとつ数あつ。しものあはれも涙
こぼれそめぬれば、おもはくはえるえんじえず
くやしさてもおもはあやしけもなかなか心
ぞきなりしてころ給つべしなどうらにもありがたも
なまうひまてはべりてかしこ給へるもすぐ

こひめくくぞおぼゆ。さてめすゞをあさりこぞ。
あまにもなきぞさゞねよりたらんもやがてそれ
おもひいでゝうしあしきさうてあしぶてんや。いづくも
よくもあひそひてとあらんおりにもうらんき
ざみをも。こすゞしうらん中よりそでちゞうりかう、
いかられなるしめ。我(われ)も今いうしろめたくてころを
われじやはまうなみめまうけるかゞさあらんひ
とをうしこそ。氣色(けしき)だにこそむつんをるゝぞか
ありかたん。心はうけるふかゝいかりともみそめ
しぶさしいとおしくおもはずさうゝるゝのよ手が
まおもひろくもいかりめべきてま。さやうなりせ

ちゝろさまざてしめべきをわざとならず。すべてこゝろ
けのこともなきうゝちらるゝえんずべきこととばかしわら（紫上ニ当）
さほまほのあはしかしむべうらんものとなむあくうら
ずみすあなすをば。それまつきそあるゝれもいまあかり
めべし。おほくハけぶもこゝろ人がらおもてまうりを
すべし。おまりむげようらゆるべくこゝろもちさるを
ふやすくらうこきやうなれど。これづゝこゝろまさ
さするそおぼし侍うしつるめかねのつらさこ
ゝあしもげなあやなしくさい。侍しあるまゝ人ハ。中将（六條）
うなずく。さしいかりておしとも衣ともこゝろま（七條ノ中将）
いそん人の。これかしげるさうるゝひあらんこそ

犬まろゝべかれけれ。心おやまちかくてミすぐさは
さしなくしてもなかどうちきこえんとおぼしけれど
それさしもあらじと。もりくしょかたなきみて
あらんとのどやかにまちきこえ給へればいとゞはづ
ことあまりてうちうちとはいひて我御ゆかしとのおぼ
君はこれさへをめでたきひめへりとせんには君のうち
縁ありてこそはまぜ給ふあとさうぐるしく心やま
しとおぼされて。よれさへめれうつせまなりて
ひざらさせねたう。中将はこれとはりこさうてそんと。（ヲ此詞ハ源氏ヨリ女ノ形とたとへて引てあり）
心入てあるまじうひおのへり。かきかはのしるまくのぞ
へておぼせ。ましてちなさくまのかたはのもの心

ましてはくりけるかまつれんじのもてつるび
ものゝ。それ加と給ふもさらにまにぬはぞこばぞさふれば
こゝろもけようしもそばへうちとわすまつけ
つゝ御かへて今めかしくさまめかしくて。おうし
きもあるかなするまでもよくまわりてきゝ人の
でうどのかうりとすゝきてまゐりかやうあわせのぞ。
なんなくしいづかしなんなをまさとのあれよ
ずくな御ことしけれ給ふ文恋一所まうでおは
れど。すゞかゝなえてかれそうすくまさる
ともうまさりけちめかとしもみしわけ給ずうく
れど。ひとのくにすゞめはうらいの山あうら海

のいかはいとのすごくうつし絵のごとけしきけれ
ものくるはしめなるにめでまの月なかばまれ。おぼえる
くもくつくりたりあれし心よせつかせてひと
さは人のめをおどろかしてぞちる花はなぞしめども
そであかめべし。されつるの山のうへすゞむ氷の
ながれめまちてさ人の家みねおとさるゝはげしきよさしが
つくやかゞびさるゝなどとぞ兆けれはうるさもませ
るすぐ。うかなりめ山の気色来ふくりはなれて
すゞみるけちかきまでされ中にぞれころむちひ
よそてなどとさんよかはいつもうかひつとをばやう
あればこのごろめ前にめあかてかゝるさうるかなふ

うきこゝはなくてさうらしこれでんるゞまりし事
がきぞらくさりしるく気色しめのはぶらみつまうどく
くちく名しこさぶちされどなをまことれさちぢを
たまやうよかさえうるはしきへのみぞ。さらでふ
れど今ひとさびしうなしへてこれば秋きちるあん
まりけるそのきさゆるまでそれぞれまして
人の心れみすよ行ありてなりさせんでもあめれ
なさけとばえされむまじくせみのへ何かとれて
じめれしし。すさぶくちくとも御けんとうてち
くわうれは源もめさ殿しのよ中おいてうじく
まんぞて。つゞえさうさそむかひおほくり。のり
紫式部

菓子仕
の師の世のとこうとさてうきん所のうちすう
もの川ハおりしかれどうつおそでハとのくも川ご
ともえ志のびとくめずたんありけれ九條の紅羽やうまざ
いとげらうまゐし时おかれとさふ人侍るこさそ
させつかやうまゐうちなどいともほまも侍しざり
しかばうゐきほどみすうきさふうちまゐはじめ人ともうり
まともらひとくめ侍らずかうへとはおもひるざり
さうじくあくてとくまさされありきくるくりしも
あみうんじといつて志侍しかバ心づきるういとく
らそおひらたりきりしうばとさひつたのまりいと
ゆうしなくうるひ侍しもうるさくそりかくもうん

なくめ身をみてしそうるぞ。なのごうくしもさうん
とぶらうしきおりくも侍そでぎのんこ心たつさえ
らうやうまたんで侍し。このえんまぬのあつやう。もとうり
さひいくうざりけつこくふも。いうそでこれ人のさせ
まほとるきさてをいでし。それもうみすぢのつころ
姿もなは口おしくハそしじとおもひたげを川く。
とるくまつきて抛まあやりまうしろきつねまそ
を心よしふとハなくもがしとおもありし
ほどよずめゆきとさひしうどかうくまな
びきさそなのびゆきさみすくきうくちをもこの
人まこやうともれんとかうるくさひつくろひうや

きんだちみしばおもてぶせにやおもひなんとばかり
ちかくてさうじまでつけてゐるかぎりは心もなく
うたがはしけれどさすがにこれまくさかるひとうちかん心
おさめずはしけれどもおもひはしやうかうのかかりはま
あるがひともちひさるひとなかりけりいかでこころざしの
わざしてどうしてこれをもすこしはあはれとも
なりさうなさけもやめんとおもひてまうしまうし
なども世ひてさしあぐべきさるしなくなりぬべらず
我よさるべき心なからばおもひこりなんとおもひ
さまへてことさらにはなさけあつくつれなきさまを
ききて女いのりどもせさするまくちふでまう

ちはいつしかさらぬだにものくるしくもおぼえて又ことに
ぞありと思はずかくわりなきおもひなるかひなきせまりけり
さうざうしくみえんともおもはずつらきことかぎりなきん
おぞなのめならずおもひなりそむる心づきなうせなば
いと絶えときかんとおもふべき人なくいまもなりはつる
おもひるびんなる人へてまゐるなるぶかくあづまべきな
どうしてもとしへてうつれとせひもへて我はけく
いひそし侍るにずしうちわびて女羽うらみは
ゐそなくおもげすきほどとうずしてえらずあらう
世をもやまひけるほいとのぞまるせひなされて心
やまうしくもあはずつらき心と思ひて思ひあるまん

おりせうけんと。年月をへつゝめん。あひおもひすぐのこ
そいとくるしくおもはんあるべかれど。うらところなそ
むかしのあはれさまざまみゆるおもはんあるとも。めづらしげいはよ
はする。うつだくもくなりて。いつくけるうきとせ。とりひ
そげまうし侍る。めもえおつきあぬすぢりまて。そのひ
ひとりとひきよきてくひて侍しと。おぼつかなくもちく
うちて。うまきずさへつきあれど。いよくまりて
らひをもすべきまゝあらず。きづつしめ給めりつきて位
いとくしくなりてつけくうしへめむ。世をそむ
きあへき身なめりたくいひをこしてさぶらふて
そばりぶうりなすあれど。ばやよびをうくめてまうでぬ

月をおりてあひみしことゝおもへばこれひ
とりやは君がうらみつゝえうしくかなしいとひ侍れ
しきみすゞまうちなきて
うちうなづき忘ひとりよりぞ人をそこや君うらまち
わらべなをおりなどいひしろひ侍しほどまめくしうには
かうべきこともおほせのへずなかしく日ごろかな
までもうちそでにもつゝしさず。おくかれものの侍り
くるまどもの条のそうぐくは夜更にいとしう
ざされかみ夜これかれまうりあひかた御てで。思ひ
めぐらさば。源氏とおもえられいみなうりたり。
ら地つきわれさびをもすさまじうらべく気色である

がありへなくろさむくやとおほせのべてれし
くば。いかかおもへるとくしきふしてゝ。雪とうち
さしひつゝまつてゝ。なかまひとわらくつめくてられ
ど。さりとをも山ひ日ばのうしくいひけかなんと古語
へしは。火はのるうへをそむけかへうきあどもものあ
はこえうち。お目いるすごくうちけて。ひきなくべき
おのゝびしなきうちあまてしのひかりやとまる
ちけりきなり。されいとゞ心すゞりするかさうし
みそらすし。さうくべきめかどもくりとまりてかやの
都まこみとそうりなんやうりめうきこてへ侍りえん
なうらもしほすず。気色であかきてそこもおでいと

ひとやごもりはなさけありしかば、あへなきこと
ちそ・さるすくゆへしなかりしも・我とうとうるゝ
ちようふれ聲やありけんと・さしもそのへたりし
ことなれど・心やありさまのはおもひ給しはことも
べきまれつゝかりも心とくめさけるあひしさ故
にとあるまほしくそ・さみすゝまかたさすてゝんほど
さへなきんぎやうちしろきうりしさうとものて
さひさる付やうはあらじとせおへて・とらくいひ給
しとぞむさもをずさるゝおぼえさんともうるれ共
のひずらくやうしずいへて・しずてありし心
なずらいえなずんさすくすまじきほしまでのど・

まおもひなかるべきなん・あひおもふべきなどいひしを
さりともえせひとるれじとせひのへしかば・共
げしうきんの心まぞおつあつあんともいはず・
いさくつるびとさそことをしけひずまでといくせひ
なげきてさるるくなり侍まらうでたくられ
まつたなんおぼしめ給し・ひとんへはうちゝされける
んかるいはざくかりまそありめべくなきんせのへ出
らうすざうるまきあることをし・まうとそれ大ずまさ
いひあるをしるまうひなかりしず・さりさびめと
いさんまもつきなりず・されどゝのきのまもさとる
まどく・それらくもひてうらさくたなん侍し

ともいはじ哀とおもひ出るより中将そのたなばたのたち
ぬふかたをのどめてながきちぎりにぞあえまし。
げにそのたつた姫のにしきにはまたしくものあ
らじ。はかなき花もみぢといふもをりふしの色あひつき
なく。はかばかしからぬは露のはえなくきえぬるわざ
なり。さあるによりかたき世とはさだめかねたるぞ
やといひはやし給ふ。さて又おなじころまかり
かよひし所は。人もたちまさり心ばせまことにゆへ
ありとみえぬべくうちよみはしりかきかいひ
くつまおと手つき口つきみなたどたどしからず。
見きゝわたり侍りき。見るめもこともなく侍しかば。

このさがなものをうちとけたるかたにて時々かく
ろへ見侍しほどはこよなく心とまり侍き。この
人うせて後いかゞはせんあはれながらもすぎぬるは
しばしばまかりなるゝにはすこしま
ばゆくえんにこのましきことはめにつかぬ所あ
るにうちたのむべくもみえずかれがれにのみ見せ侍
るほどにしのびて心かはせる人ぞありけらし。
神無月のころほひ月おもしろかりし夜うち
よりまかで侍るにある上人きあひてこのくるま
にあひのりて侍れば大納言の家にまかりとまらんと
するに。この人のいふやう。こよひ人まつらんやどなん。

あやしく心ぐるしうて。これ(本哥)あの家(え)へたちよりざりね
たなりければ。たれかくつれづれなり。池(いけ)の水のけしきみて
て月ごろはやどりすまし家(り)をすさんもさみしうてお(車)り
侍めりし。ともかりさる心をはやうこそやありけん。
これ男(おとこ)いとくすずろうさて門(かど)ちらうされすのこぶ
川もれはしりけてせばりかきなう菊(きく)いと面白(おもしろ)く
うつろひたるてかざりなさる紅葉(もみぢ)のいろいろなど。
哀(あはれ)とげによくしありける。ところなりけり。楓(かへ)より出てふ
ところし。新もうしなどつゞきりうしうほどなう。
(森)よくなりうらむをおしへさせてのへうりけりうたうちて
くうさあそせうちし。ほどなくしうはりうずうし。

まちのあくべく。ぬのもれやくちしのよきさあらして
すのうちより完しうてもとめきしうしても
なれど。さるくすめのほよおりつきなうず。おとこ
いとくめでくすれもとよあゆうきさて庭(には)の紅葉(もみぢ)
よそて。ふみわするる所ともなされなど。ゆきます。
こゝろをおりうちす
(在上人ニこと)琴(こと)の緒(篇イ)もえならぬ宿(やど)ちかしうつれるまさ人
をひさやとあけかわりありなどいひて。今(いま)ひと聲(こゑ)
聞(きく)うもやまべきぞ人のあるはよくなれこいあそなど。
いとくあざれかれど。あいそうしあつくろひたる
(本哥女ニ)まかりしは吹(かき)あるすめの楓(かへ)の緒をひきさとく

むべこ云(こと)れくぞなきいとだまめやかはすまゐく
くなりしもえてまね(手招)きされしをだんしうき
でうよえへうなひまめしくうひ絶さられ
つまどいかどなきさるはあしくみどもまばゆきさて
ちるんしゆし

しぐれぐもりくらしゆく家づく人などのあくまで
されば〻すぎさるはさてもみかりきりはおもしくも
かりめべしときぐくまてもさる所まで忘れぬよす
がとぞふかへむまはされもしげるくさしすゞひ
さりと思はれてそれ夜のとまとつけてこそ。
まかりてよしが。これかたりのことを思ひつまへ
あらすまはげにさ時の心つぶまおなさやうまとて
出さうとはいやあやまてこれもしげるくおぼし
ゆき。今よりはなしてされなんさこかへつかべ
きれ心のあくま。おもは落めべき萩の葉ひろげ
きてしなんとこ㐂かむさくのうへのあはれなれ。

えんまあへるかすぎくしさのこしそ。おかしく
おぼさりしめ。いまさりともなくとせあまりの
ほどよおぼしきりはなんするよしが。いやしき
いさめかそすゞきたえあらんあまは心をうせさまへあ
やまちしてこらん人のからくれなる恋ともしそつ
べきもれなりといまし。中ねきいのうちつくこさこ
すこしる思ひてさることはおぼえへあり。いづ
くるまつけくも人まうくらしかなりけりけれもの
がたりくるでうちわたひおいさう寸。中ねなる
がいは忘れぬのもれ語とせんとそ。いと志のびてみ
そあしらし人のさてもこれへらしけるひるりし

ながらふべきものとしも思うたまへざりしかど
なれ行まゝに哀とおぼえしかばたえ〴〵わすれ
ぬものにおもふたまへしをさばかりになればうち
たのめるけしきもみえきたのむにつけてはうら
めしと思ふこともあらんと心ながらおぼゆるおり
〳〵も侍しをみしらぬやうにてひさしきとだえ
をもかうたまさかなる人ともおもひたらずたゞあさ
ゆふにもてつけたらんありさまにみえて心ぐる
しかりしかばたのめわたることなどもありきかし
おやもなくいと心ぼそげにてさらばこの人
こそはと事にふれておもへるさまもらうたげ

なりきかうのどけきにおだしくてひさしくまか
らざりしころこのみ給ふるわたりよりなさけなくう
たてあることをなんさるたよりありてかすめいは
せたりけるのちにこそきゝ侍しかさるうきこと
やあらんともしらず心にはわすれずながらせうそこ
などもせで久しく侍しにむげにおもひしほれて心
ぼそかりければをさなきものなどもありしに思ひ
わづらひてなでしこの花をおりておこせたりし
とて涙ぐみたりさてその文のことばはととひ
給へばいさやことなることもなかりきや
山がつのかきほあるともおり〳〵に哀はかけよ

なぞしこれ箏思ひ出しまくらまくらかりしり
ば例のうしもうさきもれうしいと物おもひがほに
しあれたる家の庭さびしきをながめて虫の音に
こゝをへる気色むつし物添めきてあはれ給し
さればまじ花文いづれとわるひども尽とこ
なげきたて物ぞてなるさやまとなぞしこをかさし
ききてまげちりをまなどおやのこゝろをきる
夕顔うちつふ袖も家けきとこ夜にあはしふき
かふあるもことなりり

とらかげるいひかけて。ままめくちくうらる
まさ腹もみず。なまさぐとましおもしても。
けらぞうしくつましげままぞうりうくし
て。つくさとも色ひちりとみてんばらりるく
くさし心地とおもひうりしば。心やすくて文
とぞしときさ侍し関ば。よ。跡もなくしてうさらち
てうをみしが。まるぐ世するあしばげ。ばげるまる世すぞさ
すふらんかのれとおもひし程ま。わづりつげま
おもひやり。どイちすなしるみしましうがうくもあくが
らしさぞらまうし。しまなまるさとぞしとみずさらまれま
ちるしてだのぐくころゆうしまとき侍んなまし。代々ぞし

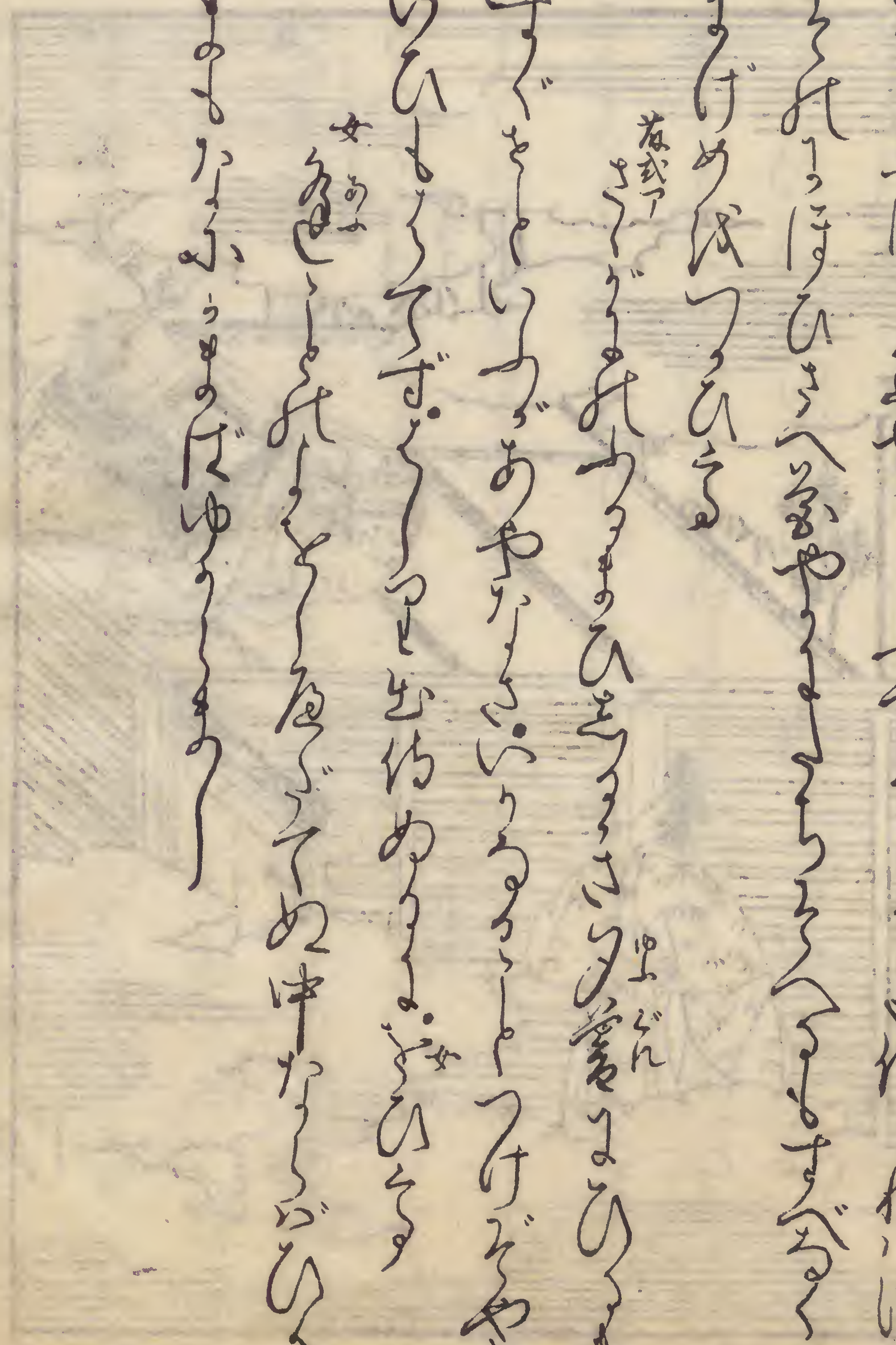
ごらうさく侍しかば。いうぞうびげのんかくおへ
とまるをびまゝえそてアメつけ侍しに。これこそ
のおひつぐうるさきあしなあれつれるくてつゝ
しとらひげかもさうそであくれさぶりしもやく
なまさうるおもひならさら。今やうくわすれりさ
くるま。れちるえてもおもひさうれぞ。かりくひと
やりなすあむものこがうゝ夕もあかんとおぼし侍。
これなんえさくも侍まうしくきみしもしげるさうる
女けつされがみさされ地もおもひいぞあるさるまわ
すれぐるれど。さしかりてうんまはわづらうりし
ぐようをばいあさるさらしとものりなんや。これ

琴すゝめけんかど〳〵しさも。すきたる罪(つみ)おもかる
べし。この心もとなき(夕顔)もうたがひそふべければ。いづ
れとつゐにおもひさだめずなりぬるこそ。世中(よのなか)やたゞ。
かくこそとりどりにくらべくるしかるべき。このさま〴〵
のよきかぎりをとりぐし。なんずべきくさはひ
まぜぬ人はいづこにかはあらん。吉祥天女(きちじやうてんによ)をおもひ
かけんとすれば。ほうけづき。くすしからんこそ。また
わびしかりぬべけれとて。みなわらひぬ。式部(しきぶ)が所(ところ)
にぞ。気色(けしき)あることはあらん。すこしづゝかたりまうせとせ
めらる。下(しも)がしもの中には。なでふことか。聞召所(きこしめしどころ)
侍らんといへど。頭中将(とうのちうじやう)まめやかにおそしとせ
めたまへば。なにごとをかとりまうさんとおもひめぐら
すに。藤式部丞(とうしきぶのぜう)。文章(もんじやう)の生(しやう)に侍りし時。かしこき女の
ためしをなん見侍りし。かの馬頭(むまのかみ)の申つるやうに。おほ
やけごとをもいひあはせ。わたくしざまの世にすまふ
べき心おきてをおもひめぐらさんかたもいたりふ
かく。ざえのきはなまなまの博士はづかしく。すべ
てくちあかすべくなん侍らざりし。それはある博
士のもとにがくもんなどし侍るとて。まかりか
よひしほどに。あるじのむすめどもおほかりと
きゝ侍りて。はかなきついでにいひよりて侍りし。
おやきゝつけて。さかづきもて出て。我両(りやう)つの途(みち)う

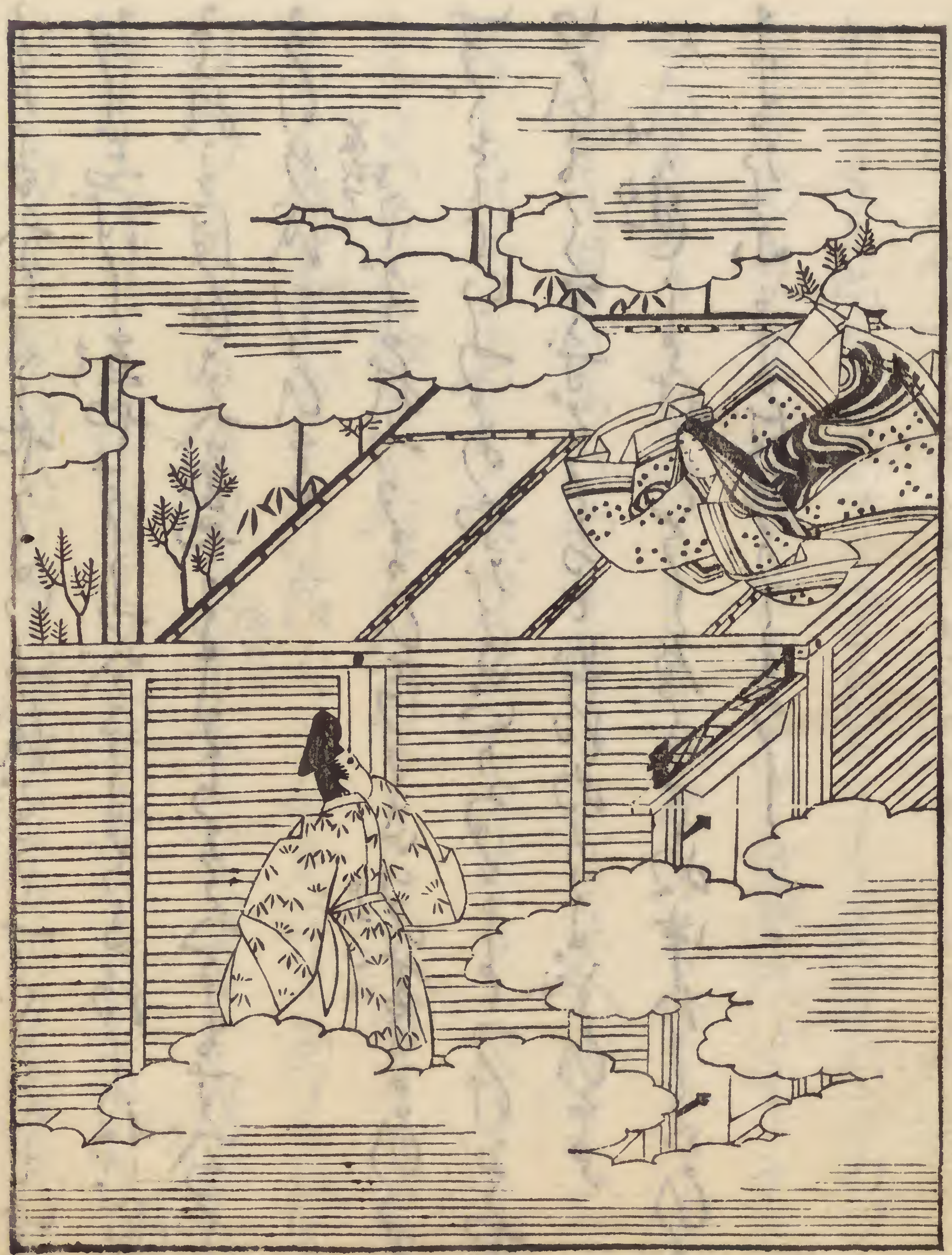
ふみをこそけれとなんこそしらせ侍りしかど。おほく
うちとけてもまいらせずなれ。おやの心をはゞかりて。
さすがうちつけにひ侍りしほどに。いとあはれにおもひ
うしろに。ねざめのうへにひるもかざしつゝさ。おほ
やけなふみまいらすべき。さうくしきことに候とて
へて。いとゞさむけにて文がみもむなしくいたし
とうさまにまず。むべくもつひまもなく侍りき。それ
ぶしえまゐらせて。このかれを師として。なん。
わづらふこともなれ文つゞりなどするひ侍り
うばいまゐらせそんは忘れ侍りしほど。なりにしこと
さしとうちかまんよ。無才のひがふ候わる

なるんふるまひなどこそんなごうづくしくなんみえし
侍し。まいりて見ぐるしれけるあまはさしもらうぐくる
くるてうるるゝれうしろうこはあるめくうちをさせあら
むざうるしくちうしとうつゝもなず我心まつさ。
すくされひくう侍めれば。おのこしもるんしさい
なきされに侍めるとやまをば。のかうといひてきんとて。
さてくおしうけめれとすうひのすと。放埒ろそ
えるぞしく。かれとおりおこあさきてらうなす。さて
いでひさうしくおうしさうしよ。あはれしうちるよ
さうゝりて侍れば。つねのうちとけおしろうら
まは侍らで。心やましさ物ぐるしてたんゆひて給

ましかすがのゝやとおこがましくも。文のこさかて
なからもせひのかゝる。これさらし今さらかく
ちらる祢らんじすべきうゝもあらず。世わたりの
ちひきてうしみさらかゝじ。女 思もとやりりて
いかやう。なりひらびやうおまさまさへよりて。ごく
ねられざうやくはかゝていとらさ紀みかのん。
えさいめん給ゝしぬ。まれあさりなしずともきうじん
かしん郭(さうじ)ホ(ら)いうけ給さらんと。いとあくれり
ひべくきくいひ侍り。在五ア いへまたかよらはいくれ
侍しんじ。さうけのゝさうめとてさらびで侍ま。女 さう
ぐちくやおぼしけんこれ香うきをなすんはすま。うち



まりのへと。さやうはいかにも。在五ア さらばすぐさんもいとゞ
おしきず。主やすしかべきまそらう侍しれば。げるは
これらにはひさへ茶やまちらるへまもすべるくて。
まげめばつらひる
在五ア さらばまれからまのひきつれさう夕暮(ゆふぐれ)まひかま
すぐさしいかゞあやかさ。いふるかしとつけぞやと
いひもしてず。さうしつと出侍めりま。女 さひさす
女 兪(あね)しまれのそし屋ぶてめ中なしぶひる
まもなふかものばゆかしまし



きすまふちしくるかなどはゆるさと。ゆばくと
ともば。式部がちあさましとせてぞそゞろて
わらひ給ふ。いづこのさる女かあるべき。おいらかに
おにとこそむかひゐたらめ。むくつけきこと。
つまはじきをして。いはむかたなしと式部をあはめ
にくみて。すこしよろしからんことをとせめ給
へど。これよりめづらしきことはさぶらひなんやとてをり
すべて男も女もわろものは。わづかにしれる
のことゝのこりなくみせつくさんと思へるこそ
いとおしけれ。三史五経の道々しきさまを
あきらかにさとりあかさむこそあいけうなからめ

めだうはめといふらんこそ世にはあらまほしけれた
はやけやうしまつきてむけにしすいらず
しもあらん。わざとなしひきかへ○どもさうらへも
どあらん人のみくはまめまめしとものこし。しをれん
まおほかへし。さうかまへてはいまんなはくしき
かうさて。さうまうしこさどられぬふかくはなうばすずさて
うきすくめるあ。おかうこそ。これうるのことをやうるう
あらばとこ種うし。心ちにはさうしもおもはざらしめ
とどれつうらはくしこさらえよしみなきれか
どらづし。とさうびたうられ。によりふの中にも
おはうしとぞうし。哥(うた)よむとせんへるへの。やうて哥

ままけられ。をかしきみつこともなぐさめのうどう
うみつ。すさまじさおりくのみなけうしそめ
しきさとなれ。人へしせねばなさけなし。えやさ
らん人へかうしるうしんさ。うべき菖蒲(せうぶ)たのど。五月(さつき)
のせちにかけそこなはまつりあし。たのまれあやめも思ひ
しげめされめよ。えなすしぬ孫どひきうけ。九日れえん
まま。ばかりに待の心とおもひめぐらし。いとまあらさ
おりる。さく花露(つゆ)とりうらうをただやうりの。ほうさ
なきさいてなのらるあへてを。さろうでもよそのづらげる
のうるおもへば。おもうして哀(あはれ)にもあはへうらけりこと
の。それおうにつきるく。めのもとまのめなどとし

からずよみいでたるなかなか心おくれてみゆ。よろづ
のことにまたなどかはさてもとおぼゆるをりから。時々
思ひわかぬばかりの心にては。よしばみなさけだゝ
ざらんなんめやすかるべき。すべて心にしれらんこ
ともしらずがほにもてなし。いはまほしから
んこともひとつふたつのふしはすぐすべく
なんあべかりけるなどいふにも。君は人ひとりの御
ありさまを心のうちにおもひつゞけ給ふ。これにた
らず。またさしすぎたることなくものし給ひけ
るかなと。ありがたきにもいとゞむねふたがる。いづ
かたによりはつともなくはてゝはあやしきこと

ども成てあかし給つ。からうじて今日は日の気色
もなほれり。かくのみこもりさぶらひ給ふも。おほ殿
の御心いとおしければ。まかで給へり。大かたのけしき
ひとのけはひもけざやかにけだかくみだれたる所
まじらず。なほこれこそはかの人々のすてがたく
とりいでし。まめ人にはたのまれぬべけれと
おぼすものから。あまりうるはしき御ありさまのとけ
がたく。はづかしげに思ひしづまり給へるをさうざう
しくて。中納言の君。中務などやうのおし
なべたらぬ若人どもに。たはぶれごとなどのたまひ
つゝあつさにみだれ給へる御ありさまを。みるかひ

かりとおもひ定しかり。おとゞもいてらのそうち
とけのえれば。氣転へてそくおりしまして。大地禮
ききしのど。あいさるみと。みなごとの人が人で乃らふ。
源羽 おかつまとそてけうそくまうりおり寸。地 いとやすうり
なうれかつまとひたちや。くつくなり神ないしよひかり
我ゞかういりハかさかりて仰りくらりとこさる御。源羽 さうし
地 れいてもいこ給うさ如くり。二條院までもおるゝす
かまそて。源羽 いづくまかふずんいしとなやましさる
よそおはよのごもわり。地 いとあしこさとなりとこ
れうれこさこゆ。さ御うみまそて志てうしくつううまう
人の宇河のかてりなまる家なん。氏比水をとさいれて

すしきうげよ仰をささ程。源羽 いとうつなかり。なや
ましさるまうしなかうひさいれはべらん所とよの
地 おま志のびくのけうらたびへどころはあまるさうり
ぬべかれど。ひさしくほどへてかてりのへさうり。
うるみかけてひこさるずへはりざ段へとおぼさんて
いとおしさるるべしとさ御うこよお母をどとの人へ
うけ給なうしちでさそて伊予のかミの紀伊の家よ。
つきむしと仰そてあ為たんまりうつれか比そて。
をりさ前よ仰れはなのけなりしや仰らんとし
うるなけくそさてかて。源羽 それ人ちくらんるたう
れしうるべうさいおどかさき撥のいおちかそろしきかち

すべてかばかりぞ。それ其中のうしろまとのの人は。
地げよろしきさかまし所にもとて人ゐらせや
ぶいとしのびてしもつかたまでしとしりしめ所を
といそぎ出る人は。左大臣にも御気色ばすれどもは
もむつましきくさぎらむしてかしまろしぬ。紀守は
かまとわづれども。人もさて入ず。寝殿のひんが
しおもてをとらひあけさせてかりそめあれ
しけるひしうり。ものの心だに人へなど。さうらふは
おかしくしるまじうり。お中家よりしだいき
してお前栽などころどもめてうへかりんず。
しくそ。ぞとはまとなきさむしのしげく寄

ほよろしげくいびよまひて。おしこさて程なりぬ
ひとぐれる殿のより出ぬいげたるのぞきおて
きけのむげらしもさられもとむとこ程ろこさみ
いそらさあらるほど

君はのどやかにながめ給て世中のあはれならう
いそぎいそぎひしこれなをたすらんかしとおぼしくゞ
おもひあがれる気色に・さうざうきかへるむすめ
なれたれ様してみえとゞめかるまゝこれ
うしおもそまさへのけはひすることあの紫あらはへ
くとしてかゝるゑどもまくゝしず・さみすゞまし
のびてかゝひなどすりけてひとさぶひさう・
かうしをあげかられど・心なしとむつかりて
おろしつれば・火ともしかうすさうげ・さうじ
のくちかりよるよや・とうかりのそでかやと
おぼさど・ひまもしなけきばしげしこそ給まこれ

ちかきもやにつどひゐたるなるべし。うちさゝめき
いふことゞもをきゝ給へば。我御うへなるべし。いと
いたうまめだちて。まだきにやんごとなきよすが
さだまり給へるこそ。さう〴〵しかめれ。されどさる
べきくまにはよくこそかくれありき給ふなれなど
いふにも。おぼすことのみ心にかゝり給へれば。まづ
むねつぶれて。かやうのついでにも。人のいひもら
さんをきゝつけたらん時などおぼえ給ふ。ことなる
ことなければ。きゝさし給ひつ。式部卿宮の姫君にあさ
がほたてまつり給ひし歌などを。すこしほゝゆが
めてかたるもきこゆ。くつろぎがましく哥ずんじがち

にもあるかな。なをみおとりはしなむかしとおぼす。
かみいでゝ。とうろかけそへ。火あかくかゝげなど
して。御くだものばかりまいれり。とばり丁もいかに
ぞは。さるかたの心もなくては。めざましきあるじなら
んとのたまへば。なによけんともえうけ給はらず。
かしこまりてさぶらふ。はしつかたのおましに。かり
なるやうにておほとのごもれば。人々もしづまりぬ。
あるじの子どもおかしげにてあり。わらはなる
殿上のほどに御覧じなれたるもあり。伊予の介
の子もあり。あまたある中に。いとけはひあてはか
にて十二三ばかりなるもあり。いづれかいづれなど

ひかるゝ。これハ紅梅のきみの末の子にて。いと
うつくしう侍けるを。おさなき程よりとられ侍て。
侍りなから人のよのすかりくて侍るなから。さしなとも
つきはめてけしうハ侍らぬを。殿上なとも思ふ
おもひけなから。すゝくもつ。えまうてらひ侍らさ
めりと申す。哀のことや此あの君や。まうしの後の
おや。さなむ侍と申すに。げにおやさをもまうけ
さりけれハ。今もとをくしめしをきて。家つくん
まいてしさてむともしろうもし。いかに改は
けんと。うけやの後をもし。世にそてさゝめるらん
もれなれなと。いとおもすきのすみ。あいようく

物し侍るなり。世の中といひもれされこそ。今も
むかしもさてまかるつるに侍し。なかりにつけてよ
其のすくをはかりひとつみすんあるれは侍りなと
ききてさす。伊与のみハかしつくや。君とも思ふんな。
いかてもわさかれ思ふとてこそ世にひて侍めり。經
すきくそさことなのいかしらかりめてうけ
ひとさ侍らすなとや。さりともまいてくちのつさく
さいつかめさをんにおろしてむやは。それみ
そいてこうし侍りて。氣色ハめりをやなと。もれ經
しめつかつるすそ。これ思ふもやまおろし侍
めゝをゑやまうけおりあへさんと守力池おいゐす

ふそこれ人ですれこそはみつてきげりまうめぐ（紙治）ハ
とけてもねられぬ夜ハいさづゝがけとおぼさうて
よ成焼んさめてこれかの（ききて）さうじのあるをよゝ人の
けるひすり紙ごろすやくいつひとれかゝれ
さうらうなりん。哀（あはれ）やとげ（れど）こゝろとゞめてやとうれ
まそてうちぶぞの人ハあうつゝ子の（小春）くるまそて拍き
すけり。いづ（小春詞）くよ。おかしまゝすぞとうれしさうてゐ乃
おうしまきそて此へ（孫右詞）ぼてうぞぬくしろ（紙治）まのうらうとは
孫右ぬるかいりよちゃんとおもひつる紙されど
けどどうりそりといふ〇のそりげゑの出でけず
さいとこうくまうのひとれバ（紙治　孫右）こもうしとまつ紙治

（小春詞）ひさしうてお目とおもひごもりめぐりをとまよひて
（これ）ほうさ夜をまそてまうりつげまゆそめでゝ
うりうれとみそりまいふ。ひよう（孫右詞）まふりば。のぞ
ききそそろてまうりてましと。〇のかげようひて目
ひさいれつろゝもす。（紙治）〇のいぶとめてもとひさけ
りと。あぢきるくお目まて。（小春詞）まるかなしろの〇治し
何かくうしとそ哭りげなりとすべし。女（孫右）房ハさうでこの
（障子こし）さうしごぐちすぢうひさ程みぞみしたるべき
（孫右詞）中将のきみいいづくまうて人げとさきこてちして
よれおそろしといふなれバなげしれ出まよ人で
みてつく人すなわち。出もやまゆまおりてゝで今

まつらんと侍といふ。されしげまうぬうけるひな
れば、げ日を心みよひさきあげのうへれど。あるる
よりはらくざりけり。其子をさうしぐちよしそて。
火は、ほのぐらきまんへばかりしひかりもの
どもを並されば、ごうがうしきさ中を分つり給て。
けるひたつ所よへのうへれだし。ひとり。いとさぞ
やうそてかしうりたるまかづうりしられど。うへ
なうさぬをしやすまで。かとあつら人と思へら。
中将めしつればなむ。今されぬおひのもとしあるそ
ちしてとのの給ともうくおもひわれぞてしもれは
とそけるこうちしてやとよびゆれどがはまるぬ

のさりうてどよりまうさてず。うちつけよかりし
心のほどこら給へんしよりうたれど。年ごろおもひ
わるる心のうちも。常にたつをんとそなんかうく家
おりをまうりそでうつらもさししはあいしとと
さうひなりし人といひとやりうるのなで。鬼神を
あしらかまでこそれけなるひなれど。いまくうと
今もえのたうずがちそるうびちてあつまつごさ
よくさへばあさましく人々まで御紀はれと
いせもいうされたてなりあてまとくへるうしもいとやく
あしくらうげなればおりしよもなでたがふ
べくもあらぬ心のたりんべとおもすまるも御はめは給ふ

すさびかはしさせ夜のほどにかよひしにさそひてまつりしを。
ちかくとすこし中かゆへさせてとてらうちちかきやかれ
れば。かきさらひてさそて。きこゆるのもとにいそぎ給ひしも
とあつさ中将が御ゆゑ何ひさしや。宰相とものの。中納言あや
しくてさぶらひつるぞ。うちじくうけひき
ちそかれをもくゆかりかる心ちすることもひとか
ぬ。あさましうこはいかなることぞとおもひまどひたる
れど中にむかさすしなさくの人おしかくしておぼ
らるるもひそかれぐるあ。それぞれの人のあまりし
らんはいかで何しん。中もさはぞそてきこえひそかれど
源 どうしもなくておもくなりあまりしる人のめざましうけ

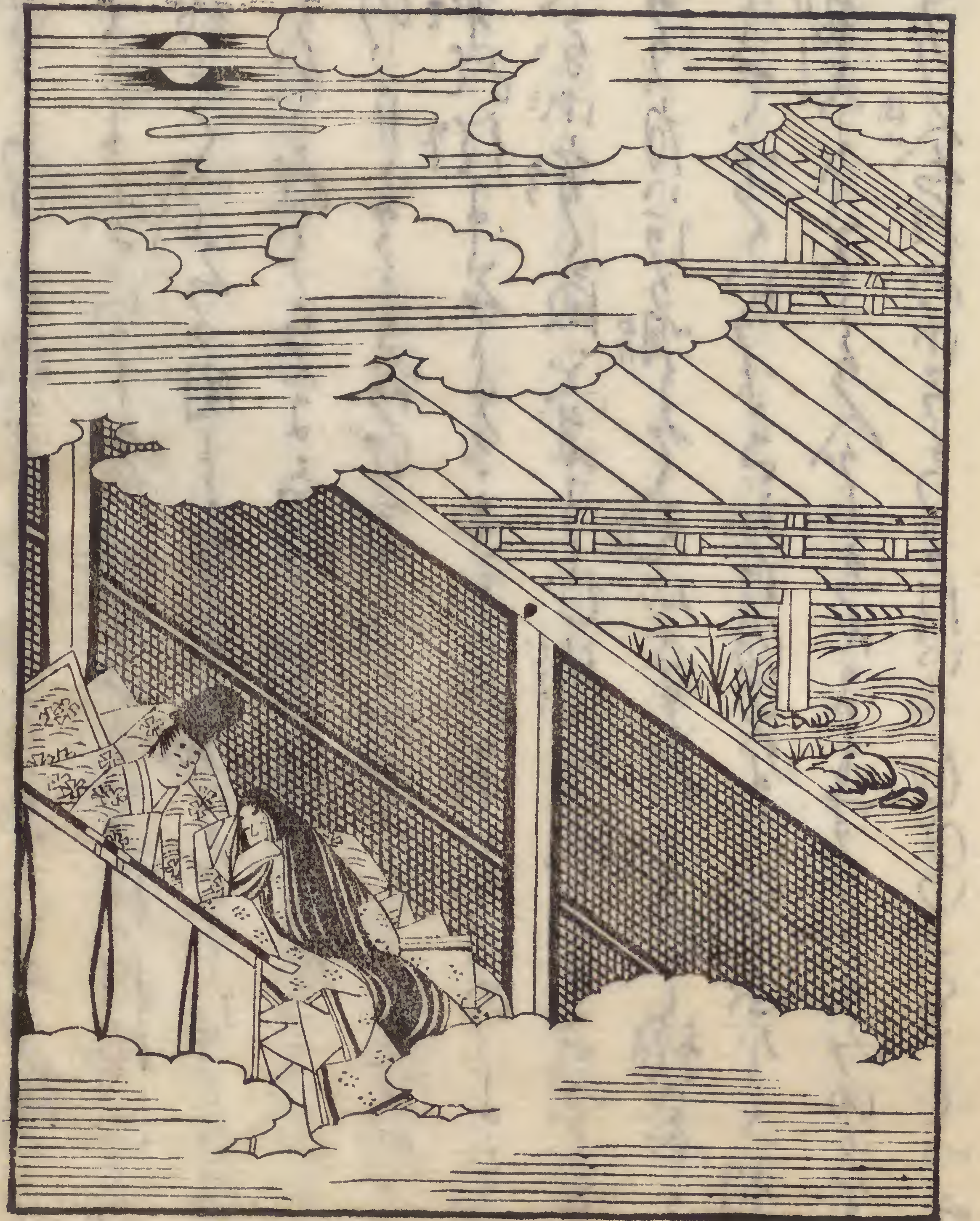
とひさまそてあながちなれむ人をもしれきうく
のかた人々おは宰相かみ人のものへしくさん人とあさりう
もうなさまたかくまで何ともなかりそでいかる
やましげなかてもおしかれど。地いのいでてうるも
さうでの上云の葉まりあらん何これをもうけり。
なさけぐをくの治つすべかめれどおほいてあさ
おしきまうけてもおほしすさそかずかめ事
たびしもおほしてうけけれ心ざし人への程もいかで
あさくいもかの人ぞうんはやうなかるさけすくる
もとこそゆかなれさてうくきもちの事をつく
なさけうくうしともひかりうるき夜もげまいと

おしくなつかしきけはひなれば。そのこはくを
まうとひとつあつかはしげにや。わかくもなくなべてる
つるおもひなしのみならなんうしろめたくありけり。
そのづからきて給やりもあへん。おぼつかなかるすさ
びいさゝかにならぬこともざらんさま。や。げによくあた
めれそてまつるも。しほりたちたるまどひを。
えけりつるもあやしうてまでなんなど。まめだちて
あろけはのまへ。いとゞうひうさればはうき給ひ。
いよくうちとけさせて。ひとしおれば。すく
よかるそろづきそうしはうしそ まいりつゝも。
さるゝのらよりひるさすそすゞてんとさひて。

つれづくのもてなしぶり今からぞやさしうて。か
まうりき心とさわそてくへされば。たすよ竹のん
ちゝして。さすずるおりべくもおぼず。まのしよろ
やましくそておかちたりければころぞくなどいつる
なりとさひておかさ給なじいとゞのくれなりふかし
くはあれど。みづからまじはらちおりゆめと
おぼす。なくさめぐさうしとおもへればなやうく
うともしきゆるおもひもおぼすべさ。おほしあすき給
なりきもしてちぎりあるとはせひ給もあ。むげる
世なせひきつめやうよ。おぼされのなすんいとつさき
とうしうれて。いとくうきめのほどのさくま

らぬゆりしなげきも見まそうつし心ならへをこゝま
しくはおもふまじき我身のことまで。これをしのびま
のちせしなやと思ひのへなくさめましとていとふ
うらなうさまの御を思ひ給ふ。さびしくうちすて
まじきうちなりなしとはうさきとれうけそて見え
おさ海。げなにいとことうたなり。とろうなうず頼なく
さめ給こともおぼゆべし。ちるもなうさめ。人でおもさお
でいといざるなうりけるよりか。御車ひきさいそでよ
などいふなり。うきもいでさそ。女なども見れうる海
がへそ。我かくいそがせ給へきさはなどいふもあり
君ハ又かやうのつねぐ。おもんぱしともいやりもし

さしあへてもいそぎてかれ文などもうちまもらんとも
いとかるきをおぼさるゝ。いとゞ心にくしおほくの
中将も出て。いとくちをしければ。ゆかしき給ても文ひさ
しめ給ひつ。いづことさそ給べき世ならんめれ心乃
つきもあはれもあさからぬ世のよのはさらに
見つかるまじきあはれとて。うらなき給。
ほのかにきこえまかりまめきこゆ。あるも思ほゆる
まふあはしくして
つれなさをうらみきこえてぬ藤圓をとりあへ
ぬまでおぼろにすまん。おがのたゞりさ海をおぼゆる。
いとつきなくまばゆきものにしてめでさきこゆれなそ



なしもなすよそしおぼしすつるはいとすくなく
心づきなしとぞいひあかづ。伊与のくにのみたちひ
やられて。夢にやみゆらんとそゞろおそろしくつゝ
まし
女のうさ成なげくよあるぞあらる君には
うちとけねてぞねもなかれける

地(ぢ)ざくあくなれバ、さうじぐらゝまで、とゝの給ふ。うち
しども人〻はげしされバ、ひさ〻そゝわれ給ほど心
ばそく〻ぶうゝ閨とみしるら〻れ、(源)なりとしなどゝ給て。
これこれみゝらんまこばしうちなるめ給ふよしおもて
のりしそゝさはげて、人〻のぞくべゝめりすみこみ
弘(こう)徽(き)殿(でん)まそゝろこゝさうじれこゝろ(上)はのまゝし給
へかけ(こ)青(あを)き庭を見わたしむ斗(ばかり)おもへるすさびども
あり。ねハい〻のあり明(あけ)てそ光(ひかり)おもわれのもれる錦(にしき)さやゝま
ゝて。中くおうしこさあけばのなり。なのま心なきさ空(そら)の
気(け)色(しき)も、しづゝろ人がしえんまもすゞてもみゆるなり
さり人〻(源氏)これめけるつまはいとむゝいつてごとつて

やゝんまみすゞぶまわゝをとゝゐりとゞうまそいぞゐぬ。
夜まゑりのまても、とみゝもまとろまれ給はず。又あ
ひゝらべきゝろなまさはよりて、(宰相)ゝ人のむすめ心の内(うち)
といゐるらんと、ぶらうしくおぼしやる。すぐれゐる
とはなされど、めやすくもてつけても、おうゐる中の
志(こゝろ)れのかゝうまゐるくまはめぐるゝ人のひいしまはげ
うき(葵)しあるをされかりしこのほどハ大殿(あふひの左大臣)のゝおハ
します。なをいとゞ(さ)まてておまうちん(うれし)とお
ちくれ心(こ)まゝうてぞゐるしく(葵)しゝろびて、さのうゝ
とおもうゝれ(源氏)あり(紫上の孫)し中(ちう)納(な)言(ごん)(小宰相)そのまはええさせてゝんや。
らうさげるゑし、さかちゝくつまふくゝまぜんぶ(法門)ゝへまも

われそれがしとのゝへば。とうしうさきおほせでまゝ
御なり。おむなかんへよのゝひろんと申すも。むすめ
れておはせど。それあるむかしはあそむのとさうしやも
さうさも侍らず。られけると世升でくてもあしな
れど。おやのをさそてまゝしぐへりとおひたげさそ。心ゆ
ゐあやうまたんさて。のかる。哀のこしやもろうしく
男しんでうし。おしよまろしやとのゝへば。さうし侍
まるべし。あそてきられてうとくきう侍れば。世のこと
ひまてむつれ侍らずと申す。さて五六日ありて。此子ね
てまゐれりこもやるよおうしと見なられど。なきまめさ
さうき女あて。おそくへとしさう。めしいれそちち

うしくらひ給ひ。心ちよいとめでくくうれしと
せふい。ありしもれ君のこともうしくとひ男給さうべき
とはいへ男しなどあそてさげよろこびうられしれば
うちいでまうしされどいとうくいひあて世給。うらこや
さそかと父の心うちもさひのふかなれど。おさればうちの
めうしもさどらずけれかつはもてさされば。めある
ましきは。なうぐしもいでさあめ。此子の心かんて
ともかくて。さすまゝはかつは。おもくぐしま
ひろげさら。いはおはそて
きし夢をあま夜あかやとなげく ものまれん
きんおかぞでゝしろもへまけり

ぬるよなけれバなど。めもをよばぬ御かきざまも
めもきりふたがりて心えぬすくせうちそへりけ
る身をおもひつゞけてふしたまへり。またの日小
君めしたれバ。まいるとて御かへりこふ。かゝる
御ふみミるべき人もなしときこえよ。とのたまへバうちゑ
ミて。たがふべくものたまはざりしものを。いかゞさは
申さむといふに。心やましくのこりなくのたまひ
しらせてけるとおもふに。つらきことかぎりなし。
いで。およすけたることハいはぬぞよき。さらバ
なまいりたまひそとむつかられて。めすにハいかで
かとてまいりぬ。きのかみすきごゝろにこのまゝはゝの

はゝ親とあふて。こゝ地まどひて。はいせうし
まろ心なれバ。これこともまてうつゞきみてあり〳〵
君めしよせて。晦日待らし志成。猶あひ之子まで
ゆるめりとえん。のへハ。がうちあつめそねさう。
いづくとの給ふ。志やくしやう。いふひたれしや。
あさましとてまてもの。ちあこハ志らじかおその
伊与のかみされバ。さうまふし人。でされどもの
ましげなるくびほそしと。そおつてゐるうしろを
まうそそうく。ほかつゝ給ふあめりさうともあこハ我
子とてそとあれよ。それまし人ハ。けささうじろ
まだなんとのの人バ。おとや。ありけん。べらしうつし

けるこそ。これとぞいふと。おぼしと。おぼそこれ子を
まれハしのそでうちまもおそもまつなどしのふ。
わぶらげ夜よのゝて。さうぞくなどもさき世給。
おとなおやめきそてあれハひあはれとまハつ○よき。
されどもそれにもいておさなし心なりはゝまちりも
をばかりぐしまき君さんさうそへんぢのおぼしと
いよつきさるべくせへば。めでさきこともワが身
うしそとおもひてうちまけるれいへも見え
ず。はのかうしげけるひあつき庭へげよたへべ
てゐやいとせひ出まそしぬうはあし○ど。おうし
きさ庭をくしそてまうりても。なかめくらは。なる

べきなどおもひくすならぬから。源氏の君はおぼしをとこくら
時のまもたゞくるしくも恋しくもおぼしいづれば。
おもへりし気色なども見えじとおぼしたらんけはひけん
かたうおぼしわづらはしくもおもひまがはれ立
より源氏も人めもげにいとつゝましうびんなき
かたちもひやあへをそれる人のとめもいとをしくと
おぼしわづらふに。いのうちより内裏へのおほさ
まへきたるのいとまちかでのちにてはまかりで
源氏のもてなされ給ふおとしもまたきゝおほさ
みおとろへて。やう水の沈いはくとうしこまう
まかでむとおぼすよひふかくなむそひゆかるゝと

ののしりさわぎ。あけくれしけりかし源氏は
ことひとも見わけめしいでゝかゝ。めもさかれとうとて
かりけるを。おぼしたらうつれ程はいとあさくし
もおもひなされぬ。さらにそうちさけ。人げをさ
かりさまどいとそてつゝてもおもちきたくる中の
やうすてすきうしなげきしが。まろやうかりへと
おもひされてたゞはるてそちつけ奉りきこえとのま
おもひみれば。ふかういでていめけれはきつゝけちゝけ
れかうけすゝしきやましくれども。のびて
うちつゝうもなどもきんしは。いかにいかなれてとさて
わる夜は中将といひしがの。しるゝかくれけり

うけるひめ。さらに心ちつきて入らくるしげめて。はやう
そこあれども。小君さまがあり。よろこびげの所もあ
はらきて。けうがる事はかり今いふうちきそてたより
もうりけ。小君 あさましくつらしとおもひてゐるうひ
なりしとおばさんと。なきさめぐらいへど。家隆詞 うくろし
うしめつころぐるへいつもかなれ。おきなるさん人のうる
ことひつきふしぎは。ふしくいむかしきるもれどとく
いひおどして。うちたちやましくれども。人でさけ
ずとさん入させてたんと見させよ。あやしと 語れ
もくさつかんといひかかりて心の中ゆは。つや
りぬれさぶまあめかえのおばらるしで。すすざきみ

おやのかげくるひとわりこきあがりし。ら陳さうらうとも
まちうけるそてまつれば。おもしろうもやあつかりし
そおてさひきつあめがおまゐけつ。もいふよほどきつぬ
やうるおばさんとおもひなりつもむかしのいつくされ
ゞなせひくぶつとてもつてても今いふかひなき
すくも咲かれども。じだんまうつるゞつかさるくてやみ
なんとおもひてさう。源心 君はいかるよりばかりなすさんと
まふおもさるきとうしろめたく待かつしのへこるよ。
小君詞 かつのうたてすましとおもひてしかれば。源心 はらさましくめづる
おもりける心のほども。身もいとくろうしくかはらう
ぬれといひくおもしき御気色なり。とぞくうりあれ

ものはかなくうちしめきてうつしこゝろはなしとり
げにさる事心もしらでこれこれをちらすあや
なくまどひぬるもれしさうつゝともしえてたゞそれと
のすへにはおもさすずろまどろまれざりければ
かずなくぬるやまおちる名のうさるあり
ままあらずこゝゆかげこさうどとこそてしらず
くわしらよわかくまあらでまどひありくに
人あやしとうつんとらび給ふ御れの人どゝえたぎ
こるをさるびと所すずろにすさまじくおぼし
つげつゝもど人のぬれ給の御ことさすらち
のぼれかけりくつるまつけりしそこゝさ

とまれとはゝおぼしながらめざめ給ひつゝ
それはさばれとおぼさどもさもおぼしたまれ
じくられさん所まづまたそれをみていけとの
すへどいはむつけまさしこあられたる人あまる
給めれどうしうげまことゆいでおもしと思へつも
あこぶるたゝすそこのすそ猶たづけるは
みとのみりけりなるつしこされたりき御どうれ
くめでしうとおもひさればつれなるき人ありも
中くあられなおぼさるもので

五十一終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan